

熊本大学埋蔵文化財調査センター年報 2017年度



THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES
KUMAMOTO UNIVERSITY/2017

24

熊本大学埋蔵文化財調査センター年報 2017年度

序 文

本年報は、2017年度に実施した調査に関するものである。

2017年度の調査で特筆すべきは、本荘北地区の医学部附属病院旧管理棟の取り壊しにともなう調査——1708調査地点で日向と熊本城を結ぶ日向往還の旧ルートと考えられる道路跡が発見されたことである。日向往還の旧ルートが考古学的に発見されたのは、初めてである。主にこの調査にあたったのは吉留広調査員であり、彼の精緻かつ粘り強い調査がなければ発見に至っていなかったかもしれない。我われのセンターでは、2018年12月から2019年4月末の期間、速報展示「発掘されたメインストリート」を開催している。関心のある方は、是非とも足を運んでいただきたい。

また、「熊本地震」の復興事業で繁忙を極めるなか、2017年11月・12月には鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの新里貴之助教に派遣職員として発掘調査の御支援をいただいた。これは、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターの御理解と施設部の特段の御配慮によって実現したものである。新里貴之助教ご本人はもちろんのこと、実現にむけて御尽力くださった関係各位に厚く御礼申し上げる。大学間の調査業務での支援は、おそらく初めてのことであり、調査に従事する者の貴重な交流の機会ともなったことを特記しておきたい。この貴重な経験は、双方の埋蔵文化財調査センターの今後の運営に活かされることと思われる。

2019年3月

国立大学法人熊本大学埋蔵文化財調査センター

センター長 伊藤正彦

例 言

1. 本書は熊本大学構内において、2016年4月1日から2017年3月末日まで行われた埋蔵文化財の調査および熊本大学埋蔵文化財調査センターの活動内容に関する年次報告書である。
2. 構内遺跡の調査は、昨年度に引き続き、年次と調査順を表す調査番号で表すこととし、出土遺物や記録類もこの番号で整理・管理している。
3. 遺跡略号は、地区ごとにローマ字3文字で以下のように表記した。黒髪町遺跡群黒髪南地区 (KKS)、同北地区 (KKN)、本庄遺跡本庄北地区 (医学部附属病院構内) (HJH)、同中地区 (旧医学部構内) (HJM)、同南地区 (医学部保健学科構内) (KHJ)、大江遺跡群薬学部構内 (HJP)、京町台遺跡教育学部附属小中学校構内 (KMS)、新南部遺跡群新南部地区 (SNB)、宇留毛神社周辺遺跡群宇留毛地区 (URG)、大江遺跡群渡鹿地区 (OED)。
4. 遺物への注記は、遺跡略号+調査番号+出土遺構 (位置) の順で行った。
5. 本書に掲載した遺物やその他の出土遺物および調査にかかわる記録類はすべて熊本大学埋蔵文化財調査センターにて保管している。
6. 本書の執筆は、II章を大坪志子・新里貴之 (鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)・山野ケン陽次郎・土野雄貴・吉留広、付録1を濱田晴美、他を大坪が行った。
7. 本書の編集は大坪が行った。

目次

<本文目次>

第I章 本年度の調査概要	1
第II章 調査の記録	5
II-1 黒髪北地区	5
1. (黒髪北) 龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他工事に伴う立会調査 (1713)	5
2. (黒髪北) 黒髪北 N1他災害復旧工事に伴う立会調査 (1717)	9
3. (黒髪北) 五高記念館南側樹木移植等工事に伴う立会調査 (1721)	12
4. (黒髪北) サークル広場屋外給水管取替工事に伴う立会調査 (1738)	14
5. (黒髪北) 赤門耐震補強工事に伴う立会調査 (1726・1727)	15
6. (黒髪) 龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他工事(ガス設備工事)に伴う立会調査 (1734)	16
7. (黒髪) 擁壁移設工事に伴う立会調査 (1735)	17
8. (黒髪北) 五高記念館廻り屋外給水管修理に伴う立会調査 (1740)	17
II-2 黒髪南地区	18
1. (黒髪南) 工学部研究資料館内部基礎調査に伴う立会調査 (1701)	18
2. (黒髪南) 屋外掲示板設置工事に伴う立会調査 (1711)	21
3. (黒髪南) 龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他工事に伴う立会調査 (1713)	21
4. (黒髪南) 黒髪南 C2取り壊し工事に伴う立会調査 (1716)	23
5. (黒髪南) 工学部百周年記念館前バナーポール取設工事に伴う立会調査 (1718)	25
6. (黒髪南) 黒髪南 C1北側植樹工事に伴う立会調査 (1720)	26
7. (黒髪南) 黒髪南 C2取り壊し工事に伴う支障排水管替工事に伴う立会調査 (1723)	27
8. (黒髪南) 黒髪南 C2新営その他工事に伴う立会・発掘調査 (1724)	28
II-3 本荘北地区	29
1. (医病) 特別高圧受電線給水漏水復旧工事に伴う立会調査 (1703)	29
2. (医病) 基幹・環境整備(旧管理棟等取り壊し)工事に伴う立会・発掘調査 (1708)	31
3. (本荘北) 西病棟他災害復旧工事(ブロック塀復旧)に伴う立会調査 (1714)	34
II-4 本荘中地区	36
1. (本荘中) 本荘中4他災害復旧工事(ブロック塀復旧)に伴う立会調査 (1704)	36
2. (本荘中) ライフライン再生工事に伴う立会調査 (1706)	38
3. (本荘中) ガス整圧器電源設置に伴う電源引込のための建柱工事に伴う立会調査 (1709)	41
4. (本荘中) ライフライン再生工事(駐輪場取設)工事に伴う立会調査 (1722)	42
5. (本荘中) 本荘中2他工作物災害復旧工事に伴う立会調査 (1733)	43
II-5 大江地区(薬学部)	43
1. (大江北) 薬学部根株除根業務に伴う立会調査 (1705)	43
2. (大江北) イノベーションセンター新営に伴う支障樹木伐採除根業務に伴う立会調査 (1712)	45
3. (大江北) イノベーションセンター新営に伴う支障配管替え工事に伴う立会調査 (1715)	46
4. (大江北) 自然共生型産業イノベーションセンター新営に伴う支障配線替工事に伴う立会調査 (1728)	47
5. (大江北・南) 樹木移植に伴う立会調査 (1736)	48
II-6 京町地区	50
1. (京町) 教育学部附属小学校管理棟新営に伴う支障配管工事に伴う立会調査 (1702)	50
2. (京町) 教育学部附属小学校管理棟とりこわし工事に伴う立会・発掘調査 (1707)	51
3. (京町) 工作物災害復旧工事に伴う立会調査 (1719)	52
4. (京町) 教育学部附属中学校給水管補修工事に伴う立会調査 (1739)	55
5. (京町) 教育学部附属中学校体育館改修その他工事に伴う立会調査 (1725)	55
II-7 新南部地区	57
1. (新南部) 加工舎取り壊し工事に伴う立会調査 (1732)	57

Ⅱ-8 城東地区	59
1. (城東町) 教育学部附属幼稚園管理棟遊戯室 災害復旧工事に伴う立会調査 (1710)	59
Ⅱ-9 渡鹿地区	60
1. (渡鹿) 教育学部倉庫新管電気設備工事に伴 う立会調査 (1729)	60
2. (渡鹿) 教育学部倉庫新管その他工事 (建築・ 機械設備) に伴う立会調査 (1730)	61
Ⅱ-10 渡鹿地区 (宿舎)	63
1. (渡鹿2) 渡鹿住宅2号棟屋外ガス管改修工 事に伴う立会調査 (1731)	63
Ⅱ-11 新屋敷地区	63
1. (新屋敷1) 新屋敷1号宿舎取り壊し工事に 伴う立会調査 (1737)	63
Ⅲ章 文化財活用活動の記録	67
1. 特別展示『生活道具はかわらない?』	67
2. 熊本大学オープンキャンパス2017『熊大遺跡 巡り』	67
3. 授業等への協力	67
Summary	69
付篇1	70
付篇2	73
付篇3	74
報告書抄録	75

<図版目次>

図1 黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (1/25000)	2
図2 黒髪北地区西半における調査地点配置図(1/2000)	6
図3 黒髪北地区東半における調査地点配置図(1/2000)	7
図4 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000)	19
図5 本荘北地区における調査地点配置図 (1/2000)	30
図6 本荘中・南地区における調査地点配置 (1/2000)	37
図7 大江地区(薬学部)における調査地点配置図 (1/2000)	44
図8 京町地区における調査地点配置図 (1/2000)	50
図9 新南部地区における調査地点配置図 (1/1250)	58
図10 渡鹿地区における調査地点配置図 (1/2000)	61

図11 新屋敷地区における調査地点配置図 (1/2000)	64
図12 「クマダイ遺跡 アプリで「発掘」新聞記事」	74
図13 「熊大の遺跡 アプリと巡る」新聞記事」	74

<写真目次>

写真1 2a 包含層検出状況 (北より)	8
写真2 2a 堅穴建物床面検出状況 (北より)	8
写真3 2a 柱穴完掘状況 (北より)	8
写真4 2a 不明遺構検出状況 (北より)	8
写真5 2b ②作業風景 (南東より)	8
写真6 2b ②北壁土層断面 (南西より)	8
写真7 ①地点石垣解体作業風景 (西より)	9
写真8 ①地点裏込め撤去構面検出状況 (東より)	9
写真9 ②地点石垣解体作業状況 (北東より)	9
写真10 ②地点最下段調整作業状況 (東より)	9
写真11 ③地点作業風景 (東より)	10
写真12 ③地点石垣撤去状況 (南より)	10
写真13 ⑩区人力掘削作業風景 (東より)	10
写真14 ⑩区掘削状況 (東より)	10
写真15 ⑤区石垣修復前状況 (南より)	10
写真16 ⑤区重機伐根風景 (南より)	11
写真17 ⑤区石垣上部裏込め石検出状況 (北より)	11
写真18 ⑤区石材取り外し後裏込め石露出状況 (南東より)	11
写真19 ⑤区石材修復作業風景 (南東より)	11
写真20 ⑤区石垣修復後 (南より)	11
写真21 ⑧区作業前風景 (南西より)	11
写真22 ⑧区重機作業風景 (南西より)	11
写真23 ⑧区裏込め除去作業風景 (西より)	12
写真24 ⑧区掘削状況 (西より)	12
写真25 移植先A 地点作業風景 (南より)	12
写真26 移植先A 地点掘削状況 (南より)	12
写真27 移植先B 地点掘削状況 (西より)	12
写真28 ①松周囲掘削状況 (南西より)	13
写真29 ①松周囲掘削状況 (南西より)	13
写真30 ②木蓮周囲包含層検出状況 (南より)	13
写真31 ②木蓮掘削状況 (南より)	13
写真32 ③石碑撤去作業風景 (南より)	13
写真33 ③撤去後状況 (北西より)	13
写真34 C・D 調査区近景 (西より)	14
写真35 C土層断面 (西より)	14
写真36 作業風景 (東南東より)	14
写真37 掘削状況全景 (東より)	14

写真38	給水管検出状況(北東より)	14	写真83	掘削作業風景(北より)	26
写真39	調査区近景(南東より)	15	写真84	掘削状況(北東より)	27
写真40	接続先遺構掘削状況(北より)	15	写真85	一次掘削作業風景(南より)	27
写真41	②作業風景(北西より)	15	写真86	遺構検出状況(東より)	27
写真42	①玉砂利検出状況(北より)	16	写真87	完掘状況(南より)	27
写真43	②玉砂利検出状況(北より)	16	写真88	調査区西壁土層断面(東より)	27
写真44	調査区近景(西より)	16	写真89	I区完掘状況(西半)(南より)	28
写真45	遺構検出状況(西より)	16	写真90	I区完掘状況(東半)(南西より)	28
写真46	溝完掘状況(北より)	16	写真91	M80大溝土層断面(南より)	28
写真47	調査区近景(西より)	17	写真92	Ⅱ区M1大溝掘削状況(西より)	28
写真48	樹木⑦硬化面検出状況(南より)	17	写真93	Ⅲ区完掘状況(南より)	28
写真49	溢水状況(南より)	17	写真94	Ⅲ区煉瓦R2掘方掘削状況(北より)	29
写真50	給水管検出状況(北西より)	18	写真95	Ⅲ区煉瓦R2掘方掘削状況(南より)	29
写真51	管下掘削状況(東より)	18	写真96	作業風景(南西より)	29
写真52	床材を剥いだ状態(西より)	20	写真97	掘削状況(南東より)	29
写真53	前身建物柱基礎検出状況(北より)	20	写真98	C1グリッド作業風景(南西より)	32
写真54	調査区北壁土層断面(南より)	20	写真99	E~G-1, FG-0グリッド遺構検出状況 (南東より)	33
写真55	柱脇試掘状況(南東より)	20	写真100	DE-4・5グリッド樹木伐根作業風景 (北東より)	33
写真56	柱脇試掘状況(南より)	20	写真101	CDEFG-6・7・8区立会南側掘削状況(東より)	33
写真57	資料館南側壁体基礎(北より)	20	写真102	SI7~9区観察池箇所掘削状況(南より)	33
写真58	資料館南側壁体基礎(北より)	20	写真103	北側井戸箇所建物北側壁撤去作業風景 (東より)	33
写真59	南側石皿出土状況(北より)	20	写真104	南側スロープ掘削状況(北より)	33
写真60	Ⅰ区作業風景(南東より)	21	写真105	南側花壇箇所掘削状況(北より)	33
写真61	1a掘削完了状況(南より)	21	写真106	調査区全景(南より)	33
写真62	2a掘削完了状況(南より)	21	写真107	外来臨床研究棟(東)柱③掘削状況 (南東より)	34
写真63	1d作業風景(北西より)	23	写真108	臨床研究棟v-14, 15区掘削状況(西より)	34
写真64	1d層位横転検出状況(西より)	23	写真109	Ⅲ区土層断面(北東より)	34
写真65	1f南壁土層断面(北より)	23	写真110	A地点作業風景(北より)	34
写真66	1f溝完掘状況(東より)	23	写真111	A地点掘削状況(北より)	34
写真67	1g②道路跡土層断面(北東より)	23	写真112	A地点東壁土層断面(西より)	34
写真68	1g②溝掘削完了状況(北西より)	23	写真113	B地点作業風景(北より)	35
写真69	梁④⑤間試掘作業風景(北より)	24	写真114	B-1地点掘削状況(西より)	35
写真70	梁④⑤間フーチング検出状況(北より)	24	写真115	C-1地点作業風景(西より)	35
写真71	南西隅基礎解体作業(北より)	24	写真116	C-1地点掘削状況(西より)	35
写真72	南西隅基礎解体作業(東より)	24	写真117	No.①作業風景(南東より)	36
写真73	旧施設部掘削地点遠景(南より)	24	写真118	No.①掘削状況(南より)	36
写真74	旧施設部掘削部底面(南より)	25	写真119	No.③掘削状況(北より)	36
写真75	A地点作業風景(北東より)	25	写真120	24区作業風景(南西より)	41
写真76	A地点掘削状況(包含層上面)(東より)	25	写真121	15c区溝遺物出土状況(南より)	41
写真77	B地点作業風景(南東より)	25	写真122	19b区溝・土坑検出状況(北より)	41
写真78	B地点掘削状況(東より)	25			
写真79	C地点掘削状況(南より)	26			
写真80	D地点掘削状況(栗石検出状況)(南西より)	26			
写真81	E地点作業風景(西より)	26			
写真82	E地点掘削状況(北西より)	26			

写真123	21区近代建物検出状況(北西より)	41
写真124	作業風景(南西より)	42
写真125	掘削完了状況(西より)	42
写真126	調査区近景(南より)	42
写真127	②作業風景(南より)	42
写真128	②掘削完了状況(東より)	42
写真129	調査区近景(東より)	43
写真130	掘削完了状況(東より)	43
写真131	樹木⑨作業風景(南東より)	43
写真132	樹木⑨撤去状況(南東より)	43
写真133	樹木⑦作業風景(南東より)	45
写真134	樹木⑦撤去状況(南より)	45
写真135	樹木③撤去状況(南より)	45
写真136	樹木①撤去状況(南より)	45
写真137	①地点作業風景(西より)	45
写真138	①地点撤去状況(西より)	46
写真139	⑤地点撤去状況(東より)	46
写真140	A地点作業風景(北より)	46
写真141	A地点掘削状況(北より)	46
写真142	A地点南部掘削状況(東より)	46
写真143	B地点作業風景(北より)	47
写真144	B地点掘削状況(東より)	47
写真145	C地点西半掘削状況(東より)	47
写真146	C地点東半掘削状況(東より)	47
写真147	①②調査区近景(北より)	48
写真148	⑥近代建物基礎検出状況(南より)	48
写真149	⑩近代建物基礎検出状況(東より)	48
写真150	サンシュユ抜根重機掘削作業風景(北より)	49
写真151	サンシュユ樹根掘削状況(北より)	49
写真152	モクゲンジ抜根人力掘削作業風景(北より)	49
写真153	モクゲンジ樹根掘削状況(北より)	49
写真154	サンシュユ移植箇所掘削状況(東より)	49
写真155	A地点①掘削状況(西より)	51
写真156	B地点1区作業風景(北より)	51
写真157	B地点6区硬化面検出状況(東より)	51
写真158	B地点8区焼土検出状況(南より)	51
写真159	②区完掘状況(南より)	52
写真160	⑦区掘削状況(南より)	52
写真161	南外周5区土器出土状況(北より)	52
写真162	南外周5区完掘状況(北より)	52
写真163	南外周4区遺物出土状況(西より)	52
写真164	C地点掘削(北より)	53
写真165	A地点東壁土層(北西より)	54

写真166	D地点東壁土層(北西より)	54
写真167	E・F地点作業風景(北東より)	54
写真168	E地点東壁土層(北西より)	54
写真169	F地点東壁土層(北西より)	54
写真170	H地点東壁土層(北西より)	54
写真171	附小民家ブロック塀作業風景(南より)	54
写真172	作業風景(南西より)	55
写真173	掘削状況(西より)	55
写真174	1区作業風景(南より)	56
写真175	1区遺構検出状況(南より)	56
写真176	1区住居跡完掘状況(南より)	56
写真177	4a・4b調査区近景(北より)	56
写真178	4a硬化面掘削状況(南より)	56
写真179	調査区近景(南西より)	58
写真180	樹根⑤撤去完了状況(東より)	58
写真181	加工舎西壁横遺構検出状況(南より)	58
写真182	②地点作業風景(東より)	59
写真183	①地点掘削状況(東より)	59
写真184	②地点掘削状況(東より)	59
写真185	③地点掘削状況(東より)	59
写真186	No①調査区近景(南より)	60
写真187	樹①掘削状況(北より)	60
写真188	樹②掘削状況(東より)	60
写真189	管理棟西側箇所掘削状況(南西より)	61
写真190	倉庫北側給水・排水管路所東側作業風景(北東より)	62
写真191	倉庫南西端給水・排水管路所掘削状況(東より)	62
写真192	倉庫北側給水・排水管路所掘削状況(東より)	62
写真193	排水管路所南壁土層断面(北東より)	62
写真194	調査区近景(南より)	63
写真195	土層断面(北より)	63
写真196	調査区近景(東より)	65
写真197	基礎周り②掘削状況(東より)	65
写真198	樹根④撤去完了状況(東より)	65
写真199	特別展示 展示説明会実施状況	67
写真200	センター展示見学の様子	67
写真201	「クマダイ遺跡巡り」を利用した遺跡巡りの様子	68

<表目次>

表1	熊本大学敷地埋蔵文化財包蔵地指定一覧	1
表2	2017年度調査一覧	3

第1章 本年度の調査概要

平成28年4月14日と16日、益城町を震源とする最大震度7を観測する熊本地震が発生した。熊本大学でも、文化財や建物に甚大な被害を受けた。本年は、熊本地震からの本格的な復興が始まった年である。

今年度の事業は、震災被害に対応する事業と、震災対応のために保留となった通常の施設整備事業がその内容である。震災対応としては、地震の被害が深刻だった二つの建物の取り壊し・新築再建事業で、施設整備事業は、医学部附属病院の環境整備事業である。このほか、表1に示したように、本年度に実施した調査は、発掘調査が3件、立会が37件である。

震災で被害が深刻だった建物の一つは、京町地区の教育学部附属小学校管理棟で、同じ場所でも再建されることになった。戦後に建設された本学の建物の地下では、既往の調査により基礎の間に遺跡が残されている可能性が高く、本地点でも解体時に基礎周囲（既存建物外周）の遺跡が影響を受ける可能性を考慮し、基礎解体前に立会を行い基礎の間や基礎周囲の確認をおこなった。合わせて、解体建物の範囲を超える新築建物の範囲についても、確認をおこなった（1707調査地点）、その結果、基礎の間

や建物周囲で、古代の遺構・遺物が確認された。建物周囲では、調査区が狭長で全体的な遺構の把握が困難であったが、遺跡の残存状況は良好と考えられた。今後、本地区の管理棟南側の工事における、設計や調査の参考となるだろう。

被害が深刻だったもう一つの建物は、黒髪南地区の旧工学部1号館（黒髪南C2）である。本建物も、同じ場所でも再建されることになった。新築建物の範囲は、既存建物より北側・東側に拡張する計画である。既往の調査成果で、当該既存建物の周囲に古代の遺跡が遺されていることが判明しており、京町地区と同様に解体時に既存建物基礎部分と合わせて既存建物周囲について確認をおこなった（1716・1724調査地点）。既存建物は地下構造が深く、土間など浅い構造を除くと基礎の間に遺跡が残されていることはなかったが、周囲では、予想どおり古代の遺跡が確認された。本調査地点も、調査区は狭長で遺跡の全体の把握は困難であったが、竪穴建物や大溝、多数のピット群が検出された。既存建物部分は既に失われているが、黒髪南地区の東西両地域で実施されてきた調査成果を結ぶ、貴重な情報となる。

表1 熊本大学敷地埋蔵文化財埋蔵地指定一覧（アミ部分は本年度調査した地区を示す）

No	地区名(学部名)	所在地	遺跡名称	遺跡の種類	遺跡の時代	備考
1	黒髪北地区(法・文・教・大教センター) 黒髪東地区(教育学部附属特別支援学校)	熊本市中央区黒髪2丁目140-1 熊本市中央区黒髪5丁目17-1	黒髪町遺跡群	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
2	黒髪南地区(工・理)	熊本市中央区黒髪2丁目39-1	黒髪町遺跡群	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
3	京町地区(教育学部附属小・中学校)	熊本市中央区京町木下5-12	京町台遺跡	集落址	弥生・近世	
4	城東地区(教育学部附属幼稚園)	熊本市中央区城東町5-9	熊本城址	城館址・熊本城周 濠遺構	近世	
5	教育学部新南部農場	熊本市東区新南部6丁目5-8	新南部遺跡	散布地	縄文・弥生	
6	沿岸域環境科学教育研究センター	上天草市松島町大字合津6061	前島貝塚	集落址	縄文・弥生	1995年度の調査により貝塚でないことが判明
7	本荘中地区(発生医学研究所、エイズ研究センター等)	熊本市中央区本荘2丁目2-1	本荘遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	
8	本荘北地区(医学部附属病院・医学部等)	熊本市中央区本荘1丁目1-1	本荘遺跡 (熊本病院敷地遺跡)	散布地・集落址・墓地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近代	
9	本荘南地区(保健学科等)	熊本市中央区九品寺4丁目21-1	本荘遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	周辺遺跡
10	大江地区(薬学部等)	熊本市中央区大江本町5-1	大江遺跡群	官衙址	奈良・平安	周辺遺跡
11	渡鹿地区(課外活動施設)	熊本市中央区渡鹿4丁目1-1	大江遺跡群	集落址	奈良・平安	
12	宇留毛地区(学生寄宿舎・職員寄宿舎)	熊本市中央区黒髪7丁目	宇留毛神社周 辺遺跡群	散布地	弥生・奈良・平安	
13	渡鹿地区(職員寄宿舎)	熊本市中央区盧徳1丁目16番	大江遺跡群	集落址	奈良・平安	
14	新屋敷(職員寄宿舎)	熊本市中央区新屋敷1丁目9番11号	新屋敷遺跡	集落址	奈良・平安	

図1 黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (1/25000)

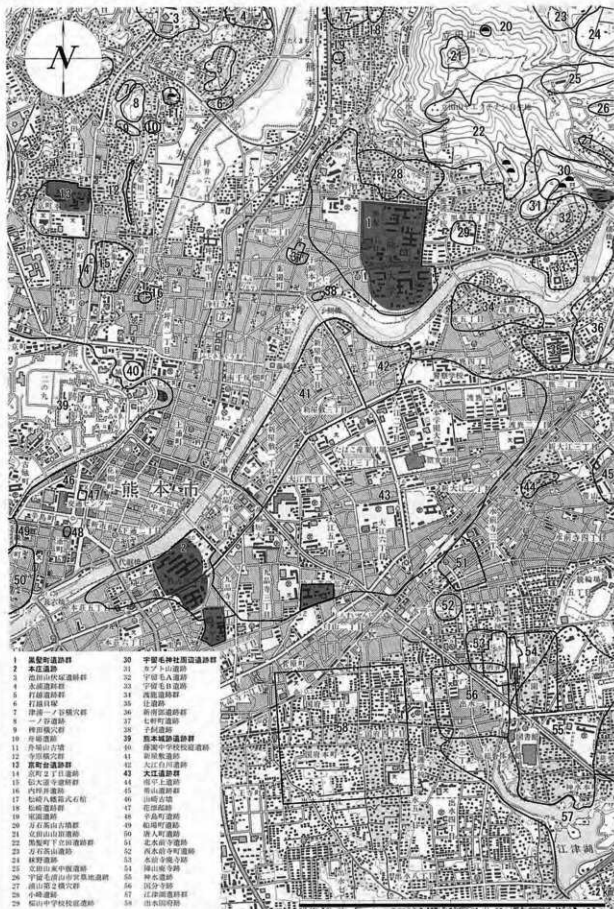


表2 2017年度調査一覧

調査期日	調査番号	地点名	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物
17・4・5	1701	(黒髮南) 工学部研究資料館内部基礎調査	立会調査	15.40㎡	古代・近代	土師器・須恵器・陶磁器・建物基礎
17・4・17~28	1702	(京町) 教育学部附属小学校管理棟新営に伴う支障配管替工事	立会調査	493.90㎡	弥生・古代 近世	住居・柱穴
17・5・22	1703	(医病) 特別高圧受電棟給水漏水復旧工事	立会調査	0.84㎡		
17・5・23	1704	(本荘中) 本荘中4他災害復旧工事(ブロック塀復旧)	立会調査	44.10㎡	古代	土師器
17・5・30	1705	(大江北) 薬学部根株除根業務	立会調査	40.75㎡		
17・6・1~11・13	1706	(本荘中) ライフライン再生工事	立会調査	995.10㎡	古代・近世 近代	道路・溝・柱穴・土坑・建物基礎
17・7・3~8・28	1707	(京町) 教育学部附属小学校管理棟とりこわし工事	立会調査/ 発掘調査	582.01㎡	縄文・弥生 古代・近世	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・青銅製品・住居・溝・柱穴
17・7・3~18・7・19	1708	(医病) 基幹・環境整備(旧管理棟棟取壊し)工事	立会調査/ 発掘調査	4691.71㎡	古代・近世 近代	土師器・須恵器・陶磁器・住居・溝・道路・柱穴
17・7・20	1709	(本荘中) ガス整流器電源設置に伴う電源引込のための建柱工事	立会調査	33.15㎡	なし	なし
17・8・28	1710	(城東町) 教育学部附属幼稚園管理棟遊戯室災害復旧工事	立会調査	1.76㎡	なし	なし
17・8・28	1711	(黒髮南) 屋外掲示板設置工事	立会調査	6.20㎡	なし	なし
17・9・1	1739	(京町) 教育学部附属中学校給水管補修工事	(立会調査)	0.48㎡	古代	なし
17・9・20	1712	(大江北) イノベーションセンター新営に伴う支障樹木伐採除根業務	立会調査	27.80㎡	なし	なし
17・9・20~18・5・14	1713	(黒髮) 龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他	立会調査	1164.00㎡	古代・中世 近世・近代	住居・柱穴・溝・道路・石垣
17・9・28	1714	(本荘北) 西病棟他災害復旧工事(ブロック塀復旧)	立会調査	56.50㎡	なし	なし
17・10・11~13	1715	(大江北) イノベーションセンター新営に伴う支障配管替え工事	立会調査	215.60㎡	なし	なし
17・10・12~12・25	1716	(黒髮南) 黒髮南C2取り壊し工事	立会調査	3220.70㎡	なし	なし
17・10・16~18	1723	(黒髮南) 黒髮南C2取り壊し工事に伴う支障排水管替工事	立会調査	4.00㎡	なし	土師器・須恵器・柱穴
17・10・18~25	1717	(黒髮北) 黒髮北N1他災害復旧工事	立会調査	131.63㎡	近代	レンガ・瓦・石垣
17・10・19~20	1718	(黒髮南) 工学部百周年記念館前バナーポール取設工事	立会調査	8.33㎡	なし	なし
17・11・7~8	1719	(京町) 工作物災害復旧工事	立会調査	9.65㎡	古代	土師器・須恵器
17・11・7	1720	(黒髮南) 黒髮南C1北側植樹工事	立会調査	0.64㎡	なし	なし
17・11・7~15	1721	(黒髮北) 五高記念館南側樹木移植等工事	立会調査	65.06㎡	古代	土師器・須恵器
17・11・24	1722	(本荘中) ライフライン再生(駐輪場取設)工事	立会調査	61.20㎡	近代	建物基礎
17・12・25~18・4・13	1724	(黒髮南) 黒髮南C2新営その他工事	立会調査/ 発掘調査	405.70㎡	古代・近代	土師器・須恵器・鉄製品・陶磁器・貨幣・住居・柱穴・溝・近代建物基礎

調査期日	調査番号	地点名	調査の種類	調査面積	時代	遺構・遺物
18.1.10~11.13.30	1738	(黒髪北) サークル広場屋外給水管取替工事	立会調査	1021㎡	近世	土坑?
18.1.10~18.2.16	1725	(京町) 教育学部附属中学校体育館改修その他工事	立会調査	260.17㎡	弥生・古代 近世	住居・柱穴・土坑
18.1.22~23	1726 1727	(黒髪北) 赤門耐震補強工事	立会調査	15.10㎡	近代	敷石(玉砂利)・赤門基礎
18.1.31	1740	(黒髪北) 五高記念館廻り屋外給水管修理	立会調査	1.05㎡	近代	なし
18.2.19~18.3.9	1728	(大江北) イノベーションセンター新営に伴う支障配線修工事	立会調査	151.42㎡	古代・近世	土師器・須恵器・陶磁器・建物基礎
18.2.21~23	1729	(渡鹿) 教育学部倉庫新営電気設備工事	立会調査	49.50㎡	古代	土師器
18.2.21~22	1730	(渡鹿) 教育学部倉庫新営その他工事(建築・機械設備)	立会調査	562.50㎡	古代	土師器
18.3.6	1731	(渡鹿2) 渡鹿住宅2号棟屋外ガス管改修工事	立会調査	1.55㎡	なし	なし
18.3.7~22	1732	(新南都) 加工舎取り壊し工事	立会調査	186.30㎡	古代・近世	土師器・須恵器・陶磁器・溝?
18.3.12	1733	(本荘中) 本荘中2他工作物災害復旧工事	立会調査	56.30㎡	なし	なし
18.3.13	1734	(黒髪) 龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他工事(ガス設備工事)	立会調査	57.30㎡	古代・近世	土師器・陶磁器・溝
18.3.23~継続中	1735	(黒髪) 擁壁移設工事	立会調査	141.00㎡	近世・近代	道路
18.3.26	1736	(大江北・大江南) 樹木移植	立会調査	28.25㎡	近代	レンガ
18.3.26~18.4.3	1737	(新屋敷1) 新屋敷1号宿舍取り壊し工事	立会調査	220.20㎡	古代・近世 近代	土師器・須恵器・陶磁器・建物基礎

環境整備事業としては、本荘北地区の医学部附属病院の旧管理棟取り壊しが大きな事業であった。旧管理棟の地下でも、基礎フーチングと地中梁の間は、遺跡が破壊されずに遺されていた(1708調査地点)。本調査地点では、熊本城と日向を結ぶ日向往還の旧ルートと考えられる道路跡が発見された。平地でありながら切通し状になっていることも確認された。また、出土遺物によって附属病院が現在地に移転した際に廃絶したことも判明した。江戸時代から明治時代にかけての城下町の変遷を考える上での新しい知見として、大きな成果である。

このほか、本荘南地区においてはライフラインの更新事業にかかわる立会・発掘調査、黒髪北・南地区では新しい龍神橋の架橋工事にかかわる市道拡幅等事業に関する立会・発掘調査等を実施した。

今後も、復興事業は継続される予定であり、本学の環境・施設整備事業も推進される。これまでの調査成果と今年度得られた調査成果、調査全般にかかわる経験と反省を活かし、関連部署との連携を保ちながら本務にあたりたい。

今年度は、特筆すべき事柄があった。鹿児島大学埋蔵文化財調査センターから、調査員の支援があったことである。人的体制の整備に苦慮しているなか、施設部の発案と、鹿児島大学の快諾によって実現した。調査を実務とする組織でのこうした人的交流・支援は、おそらく初の事例であろう。今年度の事業を遂行できたのは、この人的支援によるところが大きかった。柔軟な発想と対応をいただいた施設部及び鹿児島大学、鹿児島大学埋蔵文化財調査センターには、感謝申し上げます。

第Ⅱ章 調査の記録

Ⅱ-1 黒髪北地区 (図2・3参照)

1. (黒髪北) 龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他工事に伴う立会調査 (1713)

<調査期間>

2017年12月5・11・18~20・26・27日, 2018年1月25・26・30・31日, 2月20~22日, 3月13・14・19・20日, 5月9・10・11・14日

<調査面積>

391㎡(北地区)

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

龍神橋架け替えに伴い一般県道337号熊本菊陽線(以下「県道」)の一部が拡幅されることになったが、その際、龍神橋を通る2級市道渡鹿4丁目黒髪5丁目第1号線(以下「南市道」)の路線変更に伴う一部拡幅・立田山入口交差点形状改良、2級市道黒髪2丁目黒髪4丁目第1号線(以下「北市道」)の一部拡幅も併せて実施されることとなり、これらに面した南北黒髪地区の擁壁改修および付帯工事に伴う工事立会である。擁壁本体が石垣であることから、景観に配慮して地上部分はそのまま移設し、基礎部分のみ改良を施すという工法を採っている。9月に入り、道路境界が現況より0.1m内側にあるとして熊本市道路課より敷地の明け渡しを求められたことから南工区のうち250㎡について、立田山入口交差点形状改良の設計変更により北工区のうち30㎡が追加で工事対象区となった。調査期間中他地区での工事が集中し、現行の人員では立会に対応できない状況が生じたため、11月13・15日は鹿児島大学埋蔵文化財調査センターより新里貴之氏の派遣を受け実施した。南地区を工事中の12月19日、遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。2018年1月30日、北地区においても遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ再度連絡し、南地区と同様立会の中で記録保存するよう指導を受けた。追加対象区を中心とする一部の工事は年度を越えて継続し、2018年4月10日、南地区において再び遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ改めて連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けている。

南地区から工事着手したため、南地区を1区、北地区を2区とし、必要に応じて各小区に細分した。南地区については後述する。

2aは北市道沿いの擁壁改修箇所のうち、環境安全センター横の門以南約50m区間である。南側約2.8mは過去の擁壁改修工事の際に掘削を受けており、排土の一部は2a内に盛土されていた。この層から布目瓦2点と土師器の頸部が工事中に出土している。擁壁の背後に茶山状の盛土があり、その削平も含まれているため地表下にまで掘削が及んだ範囲は狭くなるが、それでも2aの擁壁後退は2.5~4mに及ぶ。床掘り箇所以外は北市道の現況道路面までを掘削した。このうち、包含層まで掘削が及んだのは県道沿い擁壁の北21.6m付近までであり、以北は現代埋土にとどまる。掘削の及んだ包含層は近世で、古代の包含層は擁壁の床掘り箇所、地山直上で厚さ0.1m前後を確認したが、北へ行くにつれて薄くなり、作業員詰所横付近でなくなる。擁壁の床掘り箇所0.8×44.6mでは、県道から作業員詰所横付近にかけて地表下0.4~1.3mで堅穴建物1・土坑2・溝4・道路1・柱穴1・不明遺構2を検出した。いずれの溝も1514調査・1524調査など近隣の調査区には続かないようである。

2bは、県道沿いの擁壁改修に伴う工事箇所である。擁壁移設に際して支障となった支線柱撤去箇所である2b①は、支線柱北際および西際を手掘りにより0.3×0.3m、地表下0.65m掘削し、根柱に結束されている金属バンドを露出させ切断し、支線柱を引き抜き撤去した。支線柱設置に伴う掘方の範囲におさまったが、掘方北壁で近代整地層を確認している。遺物は出土していない。2b②は、県道沿い擁壁のうち追加改修の対象となった約20m区間である。2aで掘方を確認した現代の擁壁改修は東側2mまで及んでいたが、擁壁の積み直し痕跡は東半分で見られた。西半分については外観に積み直しの痕跡がなく、五高時代の石垣であるとみられていた。掘方埋土掘削後の断面観察により地表下1.4m付近まで互層状の近代整地層を確認したが、地表下0.6~0.8mにかけて一部に現代埋土が入ることから、外観上は五高時代のままに思えた区間においても部分的に補修が行われている場合もあることが確認できた。

環境安全センター横の門移動に伴う工事立会を2cとした。大半は舗装のやり替えにとどまり掘削を作わないため、門柱部分のみ対象とした。舗装部分の一部は1734調査と重なる。既設の門周りは現代埋土にとどまり遺

図2 黒髪北地区西半における調査地点配置図 (1/2000)

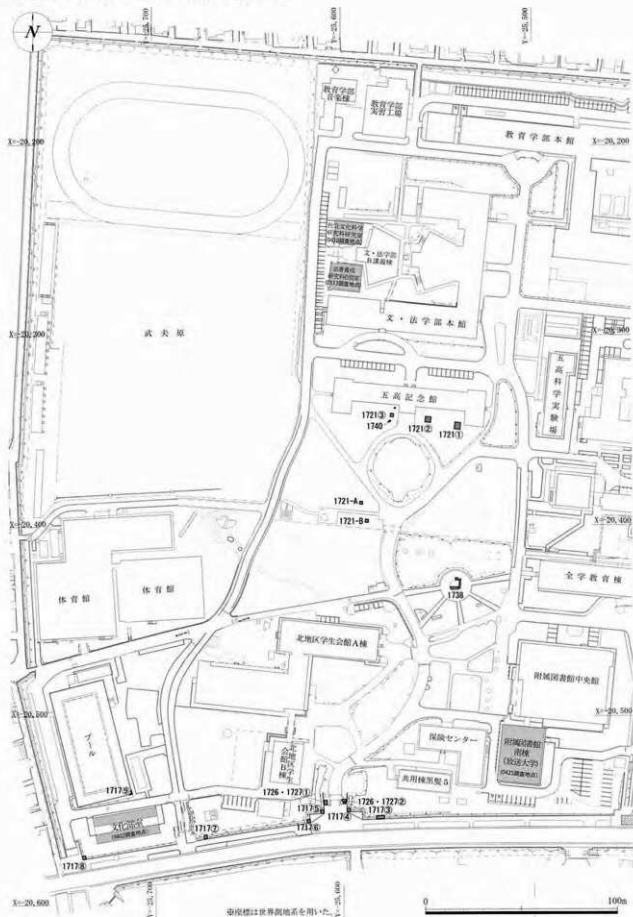
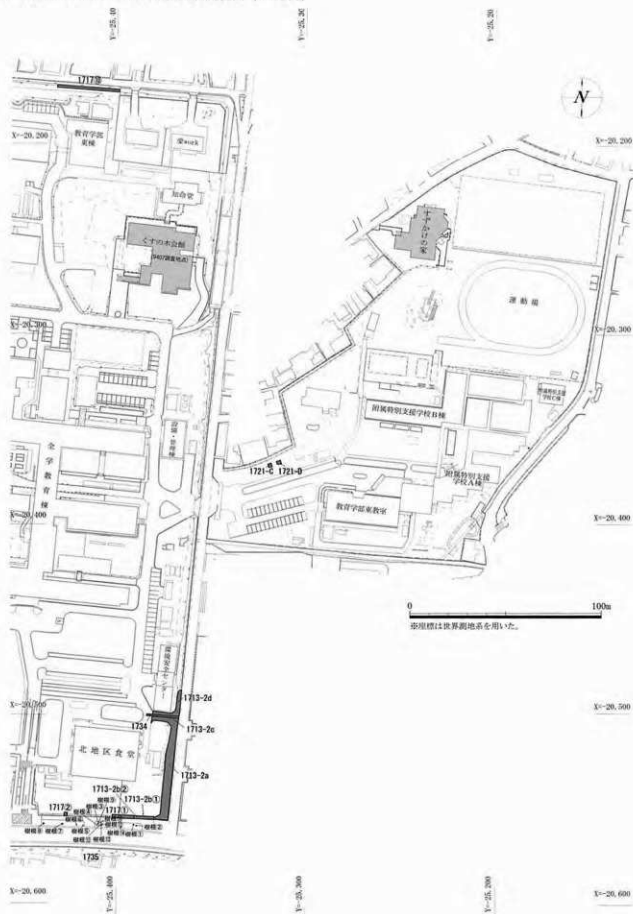


図3 黒髪北地区東半における調査地点配置図 (1/2000)



構・遺物は確認されなかった。北側門柱部分は1.6×3.6mを掘削した。地表下0.3mで地山を確認した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

南側門柱部分は1.7×3.6mを掘削した。地表下0.25mで地山を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。

2dは北市道沿いの擁壁移動箇所のうち、環境安全センター横の門以北約13m区間である。擁壁は、南端では2mほど後退するが北側は動かず、北へ行くにつれて調査区は狭まっていく。半分以上が擁壁掘方と重なり、南

写真1 2a 包含層検出状況（北より）



写真2 2a 竪穴建物床面検出状況（北より）



写真3 2a 柱穴完掘状況（北より）



側は現代掘方に切られるなど遺存状況は良好ではなかった。擁壁背後の盛土削平後の地表下0.7mで近世包含層を確認し、地表下0.8～0.9mで地山を確認した。西壁断面を観察したところ2.6m幅の遺構断面を検出した。

細長い調査区であり、部分的な成果ではあったが、北地区における遺構分布が南東側へ広がることを確認できた点は、調査中に出土した布目瓦片と併せて興味深い成果であったといえよう。

写真4 2a 不明遺構検出状況（北より）



写真5 2b ②作業風景（南東より）



写真6 2b ②北壁土層断面（南西より）



2. (黒髪北) 黒髪北 N1他災害復旧工事に伴う立会調査 (1717)

<調査期間>

2017年10月18. 23. 24日

<調査面積>

131.63㎡

<調査員>

大坪志子・山野ケン陽次郎

<調査概要・結果>

黒髪北地区の地震災害復旧に伴う工事に関わる立会を実施した。11カ所の施工箇所があったが、このうち⑦・⑨・⑩の3区については遺跡の掘削に関わらないため工事業者に掘削指示を出し。立会は省略している。

①地点では、植栽を撤去したのち、構内側から重機で石垣上面まで盛り土を撤去し、その後は石垣を一段ずつ撤去しながら、裏込め部分を掘削していった。最初の盛土から0.95m下がったところで、遺構面(地山)と考えられる暗褐色土層が検出された。石垣の全面からは、約1m背後である。控えが0.3m程度の間知石の背後0.7mに礫を相当量積んで裏込めとしている構造である。遺構

写真7 ①地点石垣解体作業風景(西より)



写真8 ①地点裏込め撤去遺構面検出状況(東より)



面(地山)の掘削は上部のほうはやや開く(幅広い)ようである。①地点は最下段まで撤去せずに、下3段は残して上部のみの積み直しであった。このため、盛土から0.95mまでは掘削をおこない、以後は間知石を外しながら裏込めを丁寧に撤去して積み直すよう方法を確認して終了した。

②地点は、①地点同様に上部の植栽、盛り土を撤去し、石垣撤去と裏込めの撤去を進めた。裏込めを撤去しても、この範囲では遺構面(地山)は検出されなかった。②地点は最下段まで撤去した。裏込めの礫に遺構面(地山)の土が付着・混在している箇所があり、石垣造成時に遺構面(地山)を削平しているようである。最下段の間知石の下には、土台として礫が敷いてあり、これらを外さないまま最下段は基本的に調整することを確認した。慎重に裏込めを外して積み直すよう指導して終了とした。

写真9 ②地点石垣解体作業状況(北東より)



写真10 ②地点最下段調整作業状況(東より)



③地点も他の地点と同様で、盛り土を撤去したのち、裏込めを確認した。上部2段のみの積み直しで、この範囲では遺構面(地山)は検出されなかった。慎重に裏込めを外して積み直すよう指導して、終了した。

写真11 ③地点作業風景（東より）



写真12 ③地点石垣撤去状況（南より）



⑩は黒髪北地区北端の教育学部棟の北側にあたるフェンス撤去に係る工事である。強い勾配で傾斜した地形の上にフェンスが設置されており、この基礎周囲の東西33m、幅1.6mの掘削である。基礎部分を2カ所試掘したところ、基礎の引き抜きは地表下30cmの掘削で問題ないとのことと、全て現代埋土内におさまるため、工事業者に指示を出して掘削を進めさせた。

④、⑤、⑥、⑧は黒髪北地区を囲む石垣南辺の修復に係る工事である。これらは明治22年に竣工した第五高等中学校の石垣に相当する。石垣は南辺東側の数メートルが部分的に校正に積み直された痕跡が確認できるが、それ以外の多くは製造当時のものと考えられる。施工箇所は熊本地震によって積み上げられた石材が大きすぎた箇所にあたる。

⑤は煉瓦造の正門西端から南に4.1mの位置の石垣の修復に係る工事である。重機の動線と作業の都合上、石垣の上で重機を動かす必要があり、石垣上にあるツバキ垣根を一時的に抜根してから掘削を再開した。石垣角から南北1.2m、東西1.9mの範囲を掘削したところ、地表下10cm程で石垣の裏込めにあたる石材と瓦片、煉瓦片が検出された。これら石垣石材の背後には10～30cm程の凹

写真13 ⑩区人力掘削作業風景（東より）



写真14 ⑩区掘削状況（東より）



写真15 ⑤区石垣修復前状況（南より）



隙が敷き詰められており、石垣の面から約60cm下がった位置に掘方の境目が確認できた。上から5つの石材を一度除去し、裏込め石材を必要だけ取り除いた後、石材を慎重に積み直した。この修復の際には凹隙をできる限り石材の裏込めに使用するよう指示をした。調査では石垣の掘方埋土内のみを掘削したため、近代以前の文化層には影響がなかった。また、隣接する④・⑥も同様の積み方とみられたため、掘削作業に注意を払いながら作業を進めるよう指示した。

⑧は黒髪北キャンパスの石垣南西角にあたる。この石垣周辺は他と比べて石材同士の間隙間が大きく、明治以降に積み直したとみられる。石垣上の地面には円礫が多数散布しており、積み直しの際の裏込め石と考えられる。南西角の石材のうち2つをはずし、裏込め石を少量除去した上で石材を再設置した。他のずれた石材については重機で押して元の位置に直すことができたため、土の掘削は伴わなかった。石垣掘方埋土内の煉瓦と瓦片のみ少量持ち帰った。

写真16 ⑤区重機伐根風景（南より）



写真17 ⑤区石垣上部裏込め石検出状況（北より）



写真18 ⑤区石材取り外し後裏込め石露出状況（南東より）



写真19 ⑤区石材修復作業風景（南東より）



写真20 ⑤区石垣修復後（南より）



写真21 ⑧区作業前風景（南西より）



写真22 ⑧区重機作業風景（南西より）



写真23 ⑥区裏込め除去作業風景（西より）



写真24 ⑥区掘削状況（西より）



写真25 移植先A地点作業風景（南より）



写真26 移植先A地点掘削状況（南より）



写真27 移植先B地点掘削状況（西より）



3.（黒髪北）五高記念館南側樹木移植等工事に伴う立会調査（1721）

<調査期間>

2017年11月7日・9日・11日・15日

<調査面積>

52.25㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

平成28年に発生した熊本地震によって被災した五高記念館の修復工事に際し、足場組立の障害となる記念館周囲の樹木2本および記念碑を移設する工事である。

7・9・11日に、最初に移植先の掘削をおこなった。移植先は、五高記念館の南側60m付近の緑地帯である。移植は仮置きで、五高記念館の修復工事が完了すれば、元の位置に戻される予定である。

1.5×1.5m、深さ0.2～0.4m（A地点）と、1.6×1.6m、深さ0.3m（B地点）の皿状の浅い穴を掘削した。いずれも埋土内で、遺物包含層や遺構面に達することはない。のちに、移植先は変更となる（後述）。

次に、移植元である樹木の抜き取り作業をおこなった。五高記念館東翼の南東に位置する松（①）では、周囲約3.6×3.0mを皿状に掘削した。地表下0.2mで遺物包含層を検出した。上面を精査したが、遺構は確認されなかった。掘削を進めたところ、地表下0.9mで地山に達した。これ以上の掘削はおこなわずに、根鉢を作ることを確認し、慎重に作業をおこなうよう指示をした。須恵器の破片が1点出土した。

写真28 ①松周囲掘削状況(南西より)



写真29 ①松周囲掘削状況(南西より)



五高記念館中央の東側(②)に位置する木蓮は、周囲を約 $3.0 \times 2.9\text{m}$ 掘削した。地表下 0.3m で遺物包含層を検出した。上面を精査したが、遺構は確認されなかった。地表下 $0.9 \sim 1.0\text{m}$ まで掘削を進めたが、地山に達することはなかった。この深さで根鉢を作る作業をおこなうことを確認し、立会を終了した。遺物は、埋土中から土師器片と須恵器片が出土した。

写真30 ②木蓮周囲包含層検出状況(南より)



写真31 ②木蓮掘削状況(南より)



「国指定重要文化財」の標柱(③)は、木蓮とは五高記念館の中央入口をはさんで西側に位置する。標柱設置時の周囲の掘方内で $1.7 \times 1.7\text{m}$ を地表下 0.6m まで掘削し、クレーンで吊り上げて撤去した。

遺物包含層や遺構面への影響はなかった。

写真32 ③石碑撤去作業風景(南より)



写真33 ③撤去後状況(北西より)



先に抜根された樹木①・②の移植先として、教育学部東教室の正門北側にある緑地2箇所を掘削した。

①(マツ)移植に伴うCは $1.9 \times 1.83\text{m}$ 、地表下 0.74m の掘削で、現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。

②(モクレン)移植に伴うD地点は2.06×1.85m、地表下0.85mの掘削である。掘方北壁から地表下0.47mでコンクリート製の建物基礎が検出された。掘削中、鉄筋で繋がったコンクリート塊が大量に出土し、基礎を破砕後そのまま埋め戻したとみられる。現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。これ以上の掘削はないことを確認し、立会を終了した。

写真34 C・D調査区近景(西より)



写真35 C土層断面(西より)



4. (黒髪北)サークル広場屋外給水管取替工事に伴う立会調査(1738)

<調査期間>

2018年1月10～11・13日・30日

<調査面積>

19.38㎡

<調査員>

大坪志子・土野雄貴

<調査概要・結果>

黒髪北地区のサークル広場で水の噴出があり、地下の給水管の損傷が原因と考えられた。応急処置のため、損傷箇所を探すことになり、その掘削に立ち会った。

残されている簡易な図面では、給水管は樹木の真下を

写真36 作業風景(東南東より)



写真37 掘削状況全景(東より)



写真38 給水管検出状況(北東より)



南北に通っていた。樹木周囲には円型のウッドデッキが設置されており、基礎は厚さ15cm程度の板状のものを約50cm間隔で立てて配置している状況であった。基礎の解体に相当の時間を要することから、基礎は残しその間を掘削した。当初、樹木の西半分のデッキを解体して掘削をおこなったが給水管が発見できず、東半分も解体して掘削をおこなった。樹木の根本の南東部、南側から2つ目の基礎間で、図面よりやや東側で給水管及び破損箇所を発見した。地表下約1.4mで給水管を検出した。湧水

のため、土層の確認は困難であった。応急処置に必要な範囲の掘削を慎重におこない立会を終了した。遺物の検出はない。

応急処置ののち、広範囲での改修工事が計画された。樹木南側の破損箇所手前から樹木の東側に迂回管路を設け、樹木北側で接続し直すよう計画が変更された。工事中の1月30日、遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。

迂回路の起点は、先に掘削した範囲のうち東端の0.7×0.8mを作業空間確保のため再掘削した。地表下1.4mで給水管を検出。地表下1.5mで確認した黒褐色土を切り込むように埋設されている。地表下1.55mから暗褐色土を確認した。近世埋土とみられる。地表下1.75mまで掘削したが土は変わらなかった。

迂回路の終点は、サークル中心にある樹木を扶んで3.0m北側を1.2×1.3m掘削した。地表下1.08mで給水管を検出した。管下を掘削中、地表下1.35mで地山と、調査区の北側から遺構を検出した。管下までは現代埋土である。掘方内の地表下1.55mで礫を確認した。大半は調査区外に広がる様子で、これ以上の掘削もないため、詳細

写真39 調査区近景(南東より)



写真40 接続先遺構掘削状況(北より)



は不明である。陶磁器細片が数点出土した。

起点と終点をつなぐ迂回路は、0.7m幅を2m・4.8m・1.6mのコの字状に地表下0.65m掘削した。現代埋土にとどまり遺跡への影響はない。これ以上の掘削はないことを確認して立会を終了した。

5. (黒髪北) 赤門耐震補強工事に伴う立会調査(1726・1727)

<調査期間>

2018年1月22・23日

<調査面積>

8.27㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

重要文化財である赤門に耐震補強梁を設置するための工事立会である。

西側を①、東側を②とした。①は2.3×1.64m、②は2.3×1.62mに加え、既設配管確認のため東側1.1×0.7mを掘削した。①・②とも、地表下0.35mで玉砂利層を確認した。①ではごみ穴とみられる現代掘方、②では既設雨水枘と配管に切られており遺存状況は良好ではなかったが、この層と呼応するように赤門本体の石材表面処理が雑に変わることから、玉砂利層は五高時代の舗装面だった可能性が高い。下位は0.2~0.4m整地層が入り、地山に至る。玉砂利層を剥いだところ、赤門基礎の際より0.4m幅の掘方を確認した。掘方埋土、特に上層からはレンガ片が大量に出土し、本体内工の際にレンガの加工残屑を埋め込んだものとみられる。地表下0.9mまで掘削したが、基礎の根積みは途中までしか露出しなかった。本体がフランドル積みであるのに対し、根積み部分はイギリス積みである。これ以上の掘削はなく、②の枘・配管は転用する旨を確認して立会を終了した。

写真41 ②作業風景(北西より)



写真42 ①玉砂利検出状況（北より）



写真43 ②玉砂利検出状況（北より）



この溝から0.7m西にもう一つ遺構を検出した。大半を現代掘方に切られており詳細は不明である。1713調査においても、また周辺の1514・1524調査区においても、これらの続きとみられる遺構は確認されていない。

写真44 調査区近景（西より）



写真45 遺構検出状況（西より）



写真46 溝完掘状況（北より）



6.（黒髪）龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他 工事（ガス設備工事）に伴う立会調査（1734）

<調査期間>

2018年3月13日

<調査面積>

17.0㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

龍神橋架け替えに伴うその他工事の一つで、黒髪北地区におけるガス管理設に伴う工事立会である。1713調査の2c区と一部重なる。工事中に遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。

1.0×17mを、2級市道黒髪2丁目黒髪4丁目第1号線（以下「市道」）から3mまでは地表下1.5m、以西は地表下0.9m掘削した。市道側で地表下0.45m、西側7mからは地表下0.25mで地山を確認した。市道の西4.5m付近から、地表下0.45mで溝を検出した。0.6m幅で調査区を横断しており、土師器・須恵器細片が数点出土した。

7. (黒髪)擁壁移設工事に伴う立会調査 (1735)

<調査期間>

2018年3月23・27日～継続中

<調査面積>

(120㎡)

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

一般県道337号熊本菊陽線の拡幅に伴い、北側歩道にある花壇のうち120㎡分の低木(マメツゲ)を伐採除根するための工事立会である。

範囲内のうち14本を対象に実施した。いずれも生育状況が良好でなく、掘削を伴うことなく抜根できた。

樹木①～④・⑥・⑦・⑨・⑬・⑭の抜取り痕から硬化面を検出しており、これらの硬化面に根の育成を阻まれ生育不良になったとみられる。硬化面はいずれも5cmほどの厚さで、地表下0.08m・0.15m付近・0.26m付近・0.31mの4群に分けられる。1726・1727調査において地表下0.35mで五高時代の舗装面を確認していることから、樹木⑦で確認した地表下0.31mの硬化面が五高時代と想定され、上位の硬化面はそれ以降のものとみられる。

写真47 調査区近景(西より)



写真48 樹木⑦硬化面検出状況(南より)



当該時期の関連対象として想定しうるものに、明治39年(1906)に設立された熊本軽便鉄道株式会社の存在がある。軽便鉄道とは蒸気機関車が小型客車1両を牽引するという輸送形態で、明治41年(1908)～大正9年(1920)にかけて南千段畑(当時の県庁前)～上立田間(大津線)が開業しており、路線内に「五高前」という駅があることから、上位硬化面は軌道敷の路盤もしくは五高前駅舎に伴っていた可能性がある。

8. (黒髪北)五高記念館廻り屋外給水管修理に伴う立会調査 (1740)

<調査期間>

2018年1月31日

<調査面積>

1.05㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

五高記念館前で発生した漏水に伴う緊急工事である。慎重工事案件であったが、遺跡の保存状況が良い五高記念館に近い場所であったので念のため立会を実施した。漏水箇所とみられる部分を0.8×0.7mの範囲で掘削した。地表下0.2mから玉砂利層と水道管を検出したが、ここでは漏水は認められず、南隣0.6×0.6mを掘削したところ破損箇所を発見した。先に掘削した範囲の一部0.2×0.2mを排水ポンプ設置のため急遽掘削し、排水後に精査した。管は下側が破損しており、水の勢いで破損箇所の下は直径0.2m、深さ0.25mほどの穴になっていた。精査の結果、地表下0.3mまで玉砂利層、地表下0.45mまで暗褐色土を確認した。釜場とした箇所では、地表下0.33mまで玉砂利を多く含む粘質土層、地表下0.5mまで暗褐色土であった。玉砂利を含む層は、1726・1727調査地点においても確認した五高時代の舗装面で、下位の暗褐色

写真49 溢水状況(南より)



色土は近代整地層とみられる。これ以上の掘削はないことを確認して立会を終了した。

写真50 給水管検出状況（北西より）



写真51 管下掘削状況（東より）



II-2 黒髪南地区

(図4参照)

1. (黒髪南) 工学部研究資料館内部基礎調査に伴う立会調査 (1701)

<調査期間>

2017年4月5日

<調査面積>

15.4㎡

<調査員>

大坪志子・吉留 広

<調査概要・結果>

震災被害を受けた工学部研究資料館の復旧工事のために、基礎の深さや構造、遺跡の状況及び検出する深さなどの情報を得るための調査をおこなった。

床は0.2×0.25m、8行×11列のメッシュにカットして床材を撤去した。機械が設置されていた場所には、補強工事が施されており、その部分は掘削を避けた。

床は、木製のブロックを敷いているが、本地点は同様の木目模様ビニールシートが張っており、その下は2層に分かれるコンクリートが厚さ22cmあり、その下は3～15cm大の栗石と粗砂の混合物が敷かれている。その下は、黄褐色の土層で、5～10cm大の礫が円形に組まれた基礎状のものが等間隔で並んでいるのが検出された。煉瓦建物が建設される前にあった建物の基礎と考えられる。記録をとり、これらを撤去した後、深さ70cm程度まで掘削した。ここまでは近世の土層で、古代の遺物包含層の上面を検出した状態である。今回の掘削はここまでとした。

次に、館内の柱と建物壁の基礎の深さと構造を確認するため、これらの周囲のみ、より深く掘削をおこなった。

柱の北側を掘削したところ、土台として厚さ26cm程度のコンクリートが打っており、その下は床下1.4m程度まで5cm前後の小石を固めた基礎が入っていた。その下には再度コンクリートのような薄い基礎と大きさ10数cmの礫の層が確認できた。

南側壁体の基礎は、既往の調査と同様に、床のレベルから5段の煉瓦が、少しずつ外に出よう持ち送り積みされており、その下は48cmの厚さがある小石を混入したモルタルの層である。その下は大きさが20cm前後ある礫が積まれている。礫は床下1.42mまでは目視でき、ピンボールを刺してみたところ、1.58mまでは礫の感触が確認できた。

南側壁体の掘削の際に、古代の遺物包含層を掘削し、層中から土師器が1点出土した。

図4 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000)

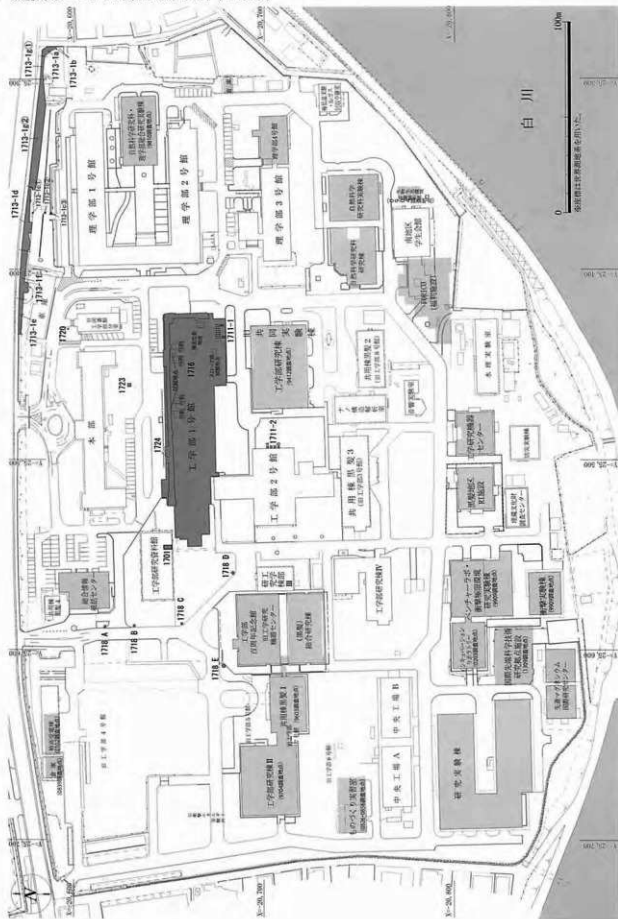


写真52 床材を剥いだ状態（西より）



写真53 前建建物柱基礎検出状況（北より）



写真54 調査区北壁土層断面（南より）



写真55 柱脇試掘状況（南東より）



写真56 柱脇試掘状況（南より）

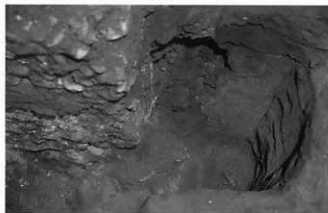


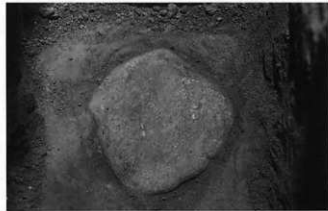
写真57 資料館南側壁体基礎（北より）



写真58 資料館南側壁体基礎（北より）



写真59 南側石皿出土状況（北より）



2. (黒髪南) 屋外掲示板設置工事に伴う立会調査 (1711)

<調査期間>

2017年8月28日

<調査面積>

62㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

工学部1号館解体に伴う4本柱の屋外掲示板移設に係る工事立会である。移設元を1区、移設先を2区とし、4本分の掘削箇所のうちそれぞれ両端2箇所、計4地点について確認することとした。

既設の掲示板は、基礎ごと抜き取って移設するため、1区では基礎周りの0.3m幅を掘削した。それぞれ地表下0.48mで柱基礎の捨てコンが確認され、柱の引き抜きが可能となったためそれ以上の掘削はしていない。現代理土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

2区は、2aを1.7×1.0mを地表下0.5m、2bを2.0×1.0mを地表下0.48mまで掘削したが、それぞれ現代理土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。これらの結果から遺跡への影響はないと判断し、残りの箇所については慎重工事を指示して立会を終了した。

写真60 1区作業風景 (南東より)



写真62 2a掘削完了状況 (南より)



3. (黒髪南) 龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他工事に伴う立会調査 (1713)

<調査期間>

2017年9月20~22・25日、11月9・13・15・16・27・28・30日、12月18~21・27日、2018年1月16・18・19・24・25日、4月4・9~13・16・18~20・23・25日

<調査面積>

493.64㎡ (南地区)

<調査員>

土野雄貴・新里貴之(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)・大坪志子・山野ケン陽次郎

<調査概要・結果>

龍神橋架け替えに伴う擁壁改修その他工事に伴う立会調査の黒髪南地区に伴う工事立会である。経緯その他については黒髪北地区の成果で触れたとおりである。

1aは擁壁移設・樹木撤去に伴う工事である。擁壁移設に伴う1a①は、黒髪南地区北東隅を3m後退させる。擁壁背後の盛土はなかった。調査区の大半は県道舗装面まで下がるが現代理土にとどまり、移設先の擁壁掘方0.9×8mにおいて地表下0.84~1.0mで地山を検出した。現代掘方に切られ検出状況はあまり良好ではない。南市道の西2.5m付近から0.5m幅の栗石を検出した。遺物は近世~近代の陶磁器片を若干出土している。

1a②は、擁壁移設に支障となる樹木の撤去に伴う工事である。掘方内にあった樹木は掘削中に撤去を進めた。現代理土にとどまる。南市道沿いの擁壁から1m、西擁壁掘方の1m南にある樹木は1a③、幹の周囲0.9×1.1m、地表下0.55mの掘削で撤去できた。現代理土にとどまり遺跡への影響はない。

1a内に存在し、支障となっていた地支線の移設工事に伴う工事が1bである。移設元は擁壁掘方内にあった。金具は地表下0.8m、地山上に設置されており遺構は確

写真61 1a掘削完了状況 (南より)



認められなかったため、金具の両側を地表下1.1mまで掘り下げ、引き上げ撤去した。遺物は出土していない。移設先はオーガによる機械掘削であったため掘削排土の観察により判断した。地表下0.8mまで現代埋土で、地表下1.1mまで掘削したが下位は明褐色土であった。地山土とみられる。遺物は出土せず、遺跡への影響はないと判断した。

1cは、県道の立田山入口交差点付近に設置されていた支線柱および支線の移設に伴う工事である。支線柱撤去に伴う1c①は、支線柱左脇の0.3×0.3mを地表下0.5m掘削し、地中の保持状況を確認したところ、支線柱は金属バンドで根物と固定されているだけであった。計画では地中切断することになっていたが、バンドを切断し、引き抜き撤去となった。現代埋土にとどまり遺跡への影響はない。1c②は支線撤去に伴う掘削であるが、敷設後に設置された駐輪場床のコンクリートが想定以上に厚く、0.1mほど所ったところでワイヤーを切断して掘削を伴うことなく工事完了した。1c③は支線柱移設に伴う掘削である。地表下0.5mまでを手掘りし、以下2.6mまでをオーガによる機械掘削する計画であったため、手掘り区間を通常の立会、機械掘削部分は掘削排土の観察による確認とした。地表下0.25mまでは礫を多く含む現表土。0.55mまでは近代整地層で、その下に黒褐色土を認めた。包含層とみられるが、0.6×0.45mの掘削範囲のうち北東隅のごく一部にしか残っておらず、掘削範囲の大半は現代掘方によって占められていた。駐輪場造成前の樹木抜取り痕とみられる。遺物は、近現代の陶磁器・瓦・板ガラスと共に土師器片が1点出土している。オーガによる掘削では、1回目の掘削排土は暗褐色主体で、板ガラスを1点確認した。2回目の掘削排土は明褐色主体で遺物を伴わない。3回目の掘削排土は砂質を帯びた褐色土で遺物を伴わない。前述の包含層はオーガによる掘削を免れている。

1dは、立田山入口交差点付近から公用車庫付近にかけての擁壁改修に伴う約27m区間である。西へ行くにつれて擁壁の後退幅は増えるが、1dでは県道舗装面以下まで現代埋土が続いており、床掘り箇所1m幅についてのみ立会を実施した。擁壁背後の盛土削平後の地表下1.2～1.8mまで近現代埋土で、下位は地山である。東から7.7m付近において地表下1.6mで近世以降とみられる構造物を検出したほか、12.4m付近からは地表下1.4mで風倒木痕とみられる層位横転を認めた。

公用車庫の裏手、1区西側約27m区間を1eとした。0.8～2.2×22.5mのうち、県道沿いの0.8～0.9mは旧擁壁掘方と重なる。調査区西側から擁壁背後の盛土削平後の

地表下1.46m付近で東西向きの溝を検出した。調査区東端からは破砕され埋め戻されたレンガ製塀が検出された。

1dと1eの間、公用車庫の東側から理学部北の駐輪場にかけての約23m区間が1fである。バス停留場を歩道側に引き込むことから擁壁の後退幅が大きく、検出面が県道舗装面より高かったことから、当調査区において最も広い調査区となった。公用車庫の東側裏手、建物が北へせり出し旧擁壁との境が最も狭くなる付近において、擁壁背後の盛土削平後の地表下0.65mで約3mにわたって良好な層序を確認した。地山は県道舗装面より高く、県道の元になったとみられる旧豊後街道は黒髪地区を切り通して開鑿された可能性が高い。この層序の東側から、地表下0.9～1.1mにかけて東西向きの溝1・南北向きの溝2・ピット2を検出した。

1g区は、9月に追加された約68m区間である。東側は1aと同じ地山高であるが、東から12mほどにある南北向きの擁壁を挟んで西側は石積1段分、0.25～0.3mほど高くなる。南北向きの擁壁の東側9mを1g①とした。擁壁背後の盛土はなく、擁壁の移動距離が0.1mであることから掘削は現擁壁の掘方内にはほぼとどまり、幅1m前後とかなり狭い調査区となった。地表下0.8mまで現代整地層。下位は地山である。1aの西1.5mでピット、調査区西端で浅い溝を検出した。ピットと溝の間を1310調査後に設置されたガス管掘方が横断している。

1g②は、南北向き擁壁から1dまでの約58m区間である。擁壁背後の盛土削平範囲は広がったものの、擁壁の移動距離は1g①同様0.1mしかなく、0.8～1.0m幅と狭い調査区となった。さらに、北側0.2～0.3mは1310調査後に埋設されたガス管掘方と重なり遺存状況は良好でなかったが、盛土削平後の地表下1.3～1.5mで道路2・溝6・土坑1・不明遺構2を検出した。このうち、1g区西端から16m付近において盛土削平後の地表下1.5mで検出された溝は、9810調査の1号溝の続きであるとみられる。

南地区で確認された遺構は多くはなかったが、良好な層序を確認できた点は大きな成果であったといえよう。

写真63 1d 作業風景（北西より）



写真64 1d 層位横転検出状況（西より）



写真65 1f 南壁土層断面（北より）



写真66 1f 溝完掘状況（東より）



写真67 1g ②道路跡土層断面（北東より）



写真68 1g ②溝掘削完了状況（北西より）



4.（黒髪南）黒髪南C2取り壊し工事に伴う立会調査（1716）

<調査期間>

2017年10月12, 17, 26, 11月7日, 9日

<調査面積>

3220.70㎡

<調査員>

大坪志子・新里貴之・土野雄貴

<調査概要・結果>

黒髪南C2（工学部1号館）を解体する工事である。基礎（地中梁・フーチング等の地下構造物）を撤去する際に、もっとも埋蔵文化財への影響が懸念されるため、基礎の規模、深さ、構造、建設時の掘方範囲等を確認するための試掘をおこなった。

フーチングは基本的に南北に3個並ぶ列が東西方向に17ある。そのうち、旧校舎北側の⑬列-⑮列間と⑯列-⑰列間を掘削した。

掘削は、地上に露出している柱及び地中梁から、北側（外側）に慎重に掘削範囲を拡張していき、フーチングの上面検出をおこなった。その結果、梁の外側で約1.4×3.2mフーチングを確認した。深さは3.8mであった。

梁から北側へ少なくとも2.9mは建設時の掘方である。旧黒髪南C2（工学部1号館）は、深い地下ビットが備えられており、今回確認した基礎掘削の深さと遺構面の検出レベルから、建物範囲内（基礎間）には遺跡の保存はないと判断された。

建物の南東隅の梁・フーチング撤去の際に実際丹立合い、基礎をある程度削ること、建物内側に倒すことにより、外周2.9mの掘方内で基礎の撤去が可能であることを確認した。この工法により、基礎撤去をおこなうことを確認して、立合いを終了した。

写真69 梁⑭⑮間試掘作業風景（北より）



写真70 梁⑭⑮間フーチング検出状況（北より）



写真71 南西隅基礎解体作業（北より）



写真72 南西隅基礎解体作業（東より）



旧黒髪南C2（工学部1号館）の南側出入口スロープを、新校舎建設工事のために掘削する予定であった。出入口スロープは、建物の外側に付随しており遺跡が残されている可能性があったため、試掘をおこなった。この結果、地表下0.7mで遺物包含層を確認した。掘削をおこなうか、中止するか、検討することとして埋め戻した。その後、掘削しない方針とした。

工学部1号館南東に位置する旧施設部跡地における、基礎間部分に包含層が残存しているかどうかの立会調査を実施した。ここは今後の新校舎建築工事の車両の搬入路とするため、必ず解体しなければならなかった。ここは1階の建物で、建設時の図面では上述の校舎のような大きな基礎を持たないことになっており、遺跡が残されている可能性があった。このため、基礎掘削の影響を受けていないと考えられる場所を試掘した。掘削は、2.7×2.0m、深度は基礎最深部に合わせて、天端から地表下2mまで確認作業を実施したが、攪乱層であることが判明した。遺物も得られなかった。そのため、慎重に掘削工事を進めるように指示し、調査を終了した。

写真73 旧施設部掘削地点遠景（南より）



写真74 旧施設部掘削部底面（南より）



5. (黒髪南) 工学部百周年記念館前パナーポール 取設工事に伴う立会調査 (1718)

<調査期間>

2017年10月19・20日

<調査面積>

16.20 (8.33㎡)

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

県道337号をはさんで国指定重要文化財赤門の反対に位置する、黒髪南地区の通用門から工学部百周年記念館に通じる道路脇に、パナーポールを5ヶ所に設置する工事である。地点名は、北からそれぞれA～E地点とした。

A地点は、総合情報統括センターの西側にある緑地帯である。1.1×1.1mの範囲を掘削したところ、地表下0.85～0.9m前後で古代の遺物包含層を検出した。上面を精査したが、遺構は確認されなかった。遺物の出土もない。これより地表下1.0mまで掘削したが、やはり遺構や遺物は検出されなかった。

B地点は、国指定重要文化財工学部資料館の西側、歩道の北西隅に位置する。1.1×1.1mの範囲を掘削したところ、地表下1.0mで古代の遺物包含層を検出した。東側半分は、近世～近代の上で、明治・大正期の建物基礎と考えられる栗石と川砂が検出された。包含層上面は精査したが、遺構は確認されなかった。遺物の出土もない。

C地点は、工学部資料館の南西に位置する。1.1×1.2mの範囲を掘削したが、掘削予定の地表下1.0mでは近世～近代の土層におさまり、遺物包含層や遺物の検出はなかった。東側15cmでは、コンクリート基礎と旧建物の壁と考えられる立ち上がり、栗石と砂を検出した。

D地点は、工学部資料館の南に位置する。約1.4×1.4mの範囲を掘削したところ、地表下0.45mから大きな基

写真75 A地点作業風景（北東より）



写真76 A地点掘削状況（包含層上面）（東より）



写真77 B地点作業風景（南東より）



写真78 B地点掘削状況（東より）



写真79 C地点掘削状況(南より)



写真80 D地点掘削状況(栗石検出状況)(南西より)



写真81 E地点作業風景(西より)



写真82 E地点掘削状況(北西より)



礎(フーチング)がほぼ全面にかかる範囲で検出された。このため、翌日破砕して撤去をおこなった。掘削予定の0.9mでは、まだフーチングの基礎である栗石と砂の上面であり、周囲も近世～近代の土層内である。遺物の出土もなかった。

E地点は、工学部百周年記念館の正面西側にある緑地帯である。予定地を掘削したところ、予定範囲の北側に東西方向のガス管が検出された。このため、西に0.3m、南に0.4m位置をずらしたが、今度は南北方向にずらした西側でガス管が検出された。使用予定のコンクリート基礎の下部を若干取りし、L字のガス管をかわして設置をおこなった。掘削はすべて埋土内におさまった。

6. (黒髪南) 黒髪南C1北側植樹工事に伴う立会調査(1720)

<調査期間>

2017年11月7日

<調査面積>

0.6㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

黒髪南地区C1西側の緑地帯に、樹木を一本植樹する工事である。

直径0.9m、深さ0.6mの皿状の穴を人力で掘削した。北側半分は攪乱で、南側半分では遺物包含層が検出された。精査の結果、最も浅いところでは地表下0.4mで遺物包含層が検出されることが分かった。予定の掘削範囲及び深さでは、遺構の検出はなく、遺物の出土もなかった。

写真83 掘削作業風景(北より)



写真84 掘削状況（北東より）



写真85 一次掘削作業風景（南より）



写真86 遺構検出状況（東より）



写真87 完掘状況（南より）



写真88 調査区西壁土層断面（東より）



7.（黒髪南）黒髪南C2取り壊し工事に伴う支障排水管替工事に伴う立会調査（1723）

<調査期間>

2017年10月16, 18日

<調査面積>

4.0㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

解体を進めていた旧黒髪南C2（工学部1号館）の基礎解体の立会い（1716調査地点）の際に、検出された排水管がまだ生きていることが判明し、この配管替えをおこなわなければ基礎解体が進められない状況となった。この管には、旧黒髪南C2（工学部1号館）の北に位置する事務局から繋がっているため、事務局の南側で応急処置をおこなうことになった。繋がった排水管を切断し、排水ポンプを設置して別の管に繋ぐものである。

排水ポンプを設置するため2×2mの範囲を掘削した。東壁は、既設の管が埋設しており、南側には共同溝が存在する。このため、範囲のうち南半分は共同溝の掘方で既に破壊され、調査対象は北側半分である。地表下0.65mで古代の遺物包含層を検出した。上面を精査したのち遺構面まで掘削した。遺構面では、堅穴建物らしきプランとビットが検出された。堅穴建物らしきプランは、掘削したが床と考えられるような土層は確認されず、完掘すると堅穴建物の掘方にしては凹凸のある窪みとなった。ただし、堅穴建物内にあたる西壁土層断面には、黒色の包含層中に遺物が水平に並ぶ箇所がある。黒色土中からの堅穴建物の掘り込みがあった可能性もある。ビットの一つは柱痕があったため、半裁して採図したのち掘り上げた。確実な遺構はビット2つである。古代の土師器片・須恵器片が出土した。

8. (黒髪南) 黒髪南 C2新営その他工事に伴う立会・発掘調査 (1724)

<調査期間>

2017年12月25日～2018年4月13日

<調査面積>

405.7㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

旧黒髪南 C2 (工学部 1 号館) の跡地に、新しく校舎を建設する事業である。ほぼ同じ位置に校舎を再建する予定であるが、若干北側と東側に拡張されるため、立会調査を実施した。予定されている範囲の一部を掘削すると新築範囲と旧建物の掘方の間には、遺跡が残されていることが確認された。当初は、建物範囲および工事のための法面を含めた範囲を調査する予定であったが、調査範囲を可能な限り狭くした。調査範囲は旧黒髪南 C2 (工学部 1 号館) に沿う形で、北側では東西方向に幅約 2 m で長さ約 102.5 m、東側では南北方向に幅約 3 m で長さ約 24 m である。南側では約 13.5 × 4.6 m の範囲を調査した。東西の西半分を I 区、東西の東半分及び東側を II 区、

写真89 I区完掘状況(西半)(南より)



写真90 I区完掘状況(東半)(南西より)



南側を II 区とした。

各調査区では、堅穴建物や土坑、溝とピット多数が検出された。また、近代の煉瓦建物の基礎も検出された。II 区で検出した東西方向の大溝は、III 区で検出した大溝とつながる可能性がある。また、I 区で検出した南北方向の大溝とは直角に交差する可能性がある。

出土遺物は古代の土師器、須恵器、石器、鉄器である。

写真91 M80大溝土層断面(南より)



写真92 II区M1大溝掘削状況(西より)



写真93 III区完掘状況(南より)



写真94 Ⅲ区煉瓦 R2掘方掘削状況（北より）



写真95 Ⅲ区煉瓦 R2掘方掘削状況（南より）



Ⅱ-3 本荘北地区

(図5参照)

1. (医病) 特別高圧受電棟給水漏水復旧工事に伴う立会調査 (1703)

<調査期間>

2017年5月22日

<調査面積>

1.71㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

特別高圧受電棟の南側の給水管で漏水が発生し、その破損部分の改修のため、掘削に立ち会った。

建物際の約1.8×1.15mの範囲を、最も深いところで0.7mまで掘削した。アスファルトの下は砂質土層で、近代～現代の洪水砂と考えられる。埋蔵文化財には影響はなく、慎重に工事を進めるように指示して立会を終了した。

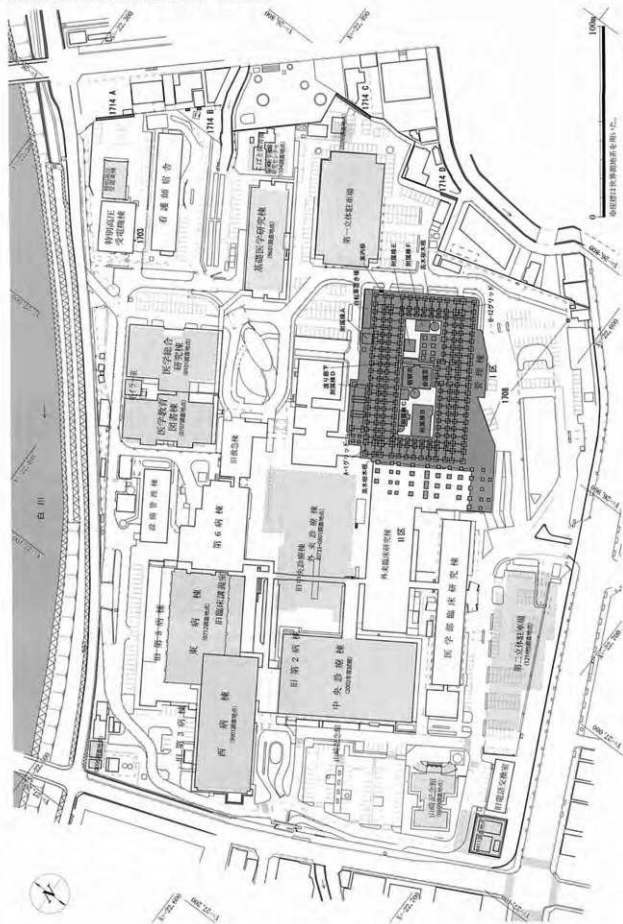
写真96 作業風景（南西より）



写真97 掘削状況（南東より）



図5 本荘北地区における調査地点配置図 (1/2000)



2. (医病) 基幹・環境整備 (旧管理棟等取り壊し) 工事に伴う立会・発掘調査 (1708)

<調査期間>

2017年7月3日～3月30日 (継続)

<調査面積>

7,681.2㎡

<調査員>

吉留 広・大坪志子・新里貴之 (鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)・土野雄貴。

横田光智 (株式会社有明測量開発社)

<調査概要・結果>

旧管理棟・旧外来臨床研究棟を取り壊す工事に係る立会・発掘調査である。このうち旧管理棟の範囲をⅠ区、旧外来臨床研究棟の範囲をⅡ区、恵和会の建物北側をⅢ区と分別し調査をおこなった。

Ⅰ区の工事は、旧管理棟建物地下の地中梁・フーチングの撤去、中庭の高木樹木根・附属棟BCDEFの基礎・渡り廊下の基礎・会議室の基礎・観察池の撤去、建物の外側にある附属棟A(井戸)・附属棟a・自転車置き場の基礎・案内板の基礎・高木樹木根・スロープ・花壇の撤去、既存地盤の整地からなる。

Ⅱ区の工事は、外来臨床研究棟の地中梁・フーチングの撤去、既存地盤の整地からなる。

Ⅲ区の工事は恵和会の建物の北側にある水道配管の切り壊し工事のための掘削からなる。

Ⅰ区は最初に旧管理棟の北西端から地中梁・フーチングを撤去するための掘削をおこなった。重機で掘削をおこなったところ地中梁が検出される地表下1.7m程までは全体的に削平されており、梁とフーチングの掘方以外は褐色の地山が残っている状況であった。フーチングは地表下1.8m程、褐色土の地山は1.9m程で検出された。調査区内は梁とフーチングでいくつもの小部屋に区切られていたためこれを利用して、個々の部屋に名前を付けグリッドとした。東西軸に西側から東側へ一つの部屋ごとにA～V、南北軸に北側から南側へ1～13まで番号をふった。Ⅰの横列から北側を掘削する際は0番をふっておりAの縦列から西側を掘削する際は小文字のアルファベットzから降順で番号をふっている。

E-1グリッドを掘削した際、褐色砂質の地山から黒褐色土の古代の時期と思われるピット、土坑を検出した。地中梁・フーチングの撤去方法は、クラッシャーを取り付けたバックホーで地中梁を切断し、フーチングと独立させ、クラッシャーで挟み持ち上げて撤去するというものであった。そのため地中梁にクラッシャーを差し込む際に地山を傷つけることや、大型の重機が行き来するこ

とによって地山を傷つけることが考えられ、遺構を壊さず地中梁・フーチングを撤去することは難しいと判断し、7月5日に熊本市教育委員会文化振興課および熊本県教育庁文化課に連絡をし、立会調査から発掘調査に切り替わることとなった。

Ⅰ・Ⅱ区の調査は主に深い掘削を要する梁・フーチングを撤去する範囲が発掘調査の対象で、その他の支障物撤去のための掘削は遺構が検出されない高さであったため立会での調査とした。発掘調査範囲内は、褐色土の地山が検出面であったが、発掘調査範囲外の梁やフーチングが存在しない壁には標高13.5m付近から近世包含層が残っており、竪穴建物も複数見つかっている。調査区内の竪穴建物は北側半分から1基、南側半分から13基検出した。調査区は北側から南側に標高が下がっており、南側に行くにつれ遺構の残りが良くなる状況であった。

Ⅰ区が発掘調査の範囲内からは竪穴建物12基、溝16条、道路1条、土坑15基、ピット複数基を検出した。遺物は縄文時代の土器・古墳時代後期～平安時代の土師器や須恵器・鉄器、近世～近代の陶磁器・土製品・古銭、火打石・獸骨等が出し、その量は大型コンテナ約18箱に及んだ。

旧管理棟の中庭の立会調査としてD-4・5グリッドに位置する高木樹木根箇所撤去作業はクラッシャーを取り付けたバックホーで真上に樹木を引き抜いた。その後土をさらい観察すると、地表下0.9mのところで側面に厚さ5cm程の硬化面を確認した。直上に出土する遺物は近代の陶磁器であったため、病院を建てる際の造成土と判断した。しかし、後の調査でこの地点の地下には江戸時代から明治期まで使われた道路遺構があったことがわかり、樹木撤去の際に確認した硬化面は道路の路面であったことがわかった。その他の樹木撤去箇所は包含層に影響はなかった。

附属棟Bは6～8-D～Hグリッドに位置する。支障建物の範囲とクラッシャーを差し込む幅1mを含め幅12.5×11.0mの範囲を地表下0.8m掘削した。支障建物の底には碎石が敷いてあり下の土を触らずにクラッシャーで持ち上げ撤去することができた。クラッシャーを差し込むための幅1mはコンクリートや碎石を含む現代理土内におさまる。その他の箇所は建物の掘方内におさまった。遺構・遺物の検出はなかった。

その他の附属棟C～F・渡り廊下箇所は深さが0.75mにおさまる。クラッシャーで支障物を引き上げる工程も考慮すると包含層に影響はないと判断し、工事の流れで慎重に掘削を行ってよいと指示した。

Ⅰ-6グリッドに位置する観察池箇所は道路遺構の

ルート上にあり、予定の掘削深度が1.05mと樹木撤去の際に硬化面を確認したレベルに近かったため、立会をおこなった。幅5×5mの範囲を地表下1.05m掘削した。底部には碎石が敷いてあり、掘削は掘方内におさまり包含層への影響はなかった。碎石を除去すると硬化面を確認した。硬化面の範囲を記録し立会は終了した。遺物は検出されなかった。

既存地盤の整地は中庭部分を0.3m程掘削するが、包含層には影響がないため慎重に工事するように指示し調査を終了した。

旧管理棟の外周の立会調査として附属棟A（井戸）箇所はOPQ-0グリッドに位置する。幅6×6mの範囲で地表下2.3m掘削したが、全て井戸の掘方埋土内におさまった。その西側にある附属棟aは4×2.5mの大きさであったが基礎が無かったため、クラッシャーで引き揚げた。引き抜き痕は地表F0.4mで包含層への影響はなかった。遺物の検出はなかった。

自転車置き場箇所・案内板箇所は掘削深度が0.2m以内におさまり包含層への影響はなかった。遺物の検出はなかった。

高木樹木根の撤去は中庭と同様にクラッシャーで引き抜いた。その後土を観察したところガラスや碎石を含む現代埋土内におさまっており包含層への影響はなかった。遺物の検出はなかった。

スロープ箇所はBC-13、H1J-13、NOP-13グリッドに位置する。掘削深度は0.75mした。下面には碎石が敷かれており土を触らずに取り上げることができた。碎石を除去し土を確認すると攪乱埋土であった。包含層に影響はなく遺物も検出されなかった。H1J-13、NOP-13グリッド箇所も状況は同じであった。

花壇箇所はKLM-13区の南側に位置する。幅0.8×1.5mを地表下0.7m掘削した。全て現代埋土内におさまり包含層への影響はなかった。

Ⅱ区旧外来臨床研究棟の建物は旧管理棟と基礎の間隔が違うため新たにグリッドの番号をふりなおした。縦軸はu~zで横軸は1~12まで振っている。また、基礎の構造も異なっており旧管理棟が地中梁やフーチング部分のみを掘削されているのに対し、旧外来臨床研究棟のu~z-1~9グリッドは全面を掘削し平らにしてから基礎を造られ、地表下2.1mまで削平されていた。この状況では浅い遺構は壊されている可能性が高かったが、深い遺構として旧管理棟で検出した切通しの構造の道路遺構が旧外来臨床研究棟の方へ向かっていた。そのため、まず旧外来臨床研究棟内の道路遺構の推定ライン上の基礎周辺を試掘したところ、0.1~0.15m程表土を掘削した

ところで遺構埋土が残存していることを確認した。当初の計画では地中にクラッシャーを差し込み基礎とフーチングを切断し取り上げる予定であったが、遺構が検出されたためクラッシャーを地中に差し込む前に調査が必要となった。しかし、建物を壊してから調査ではコンクリート片が地中に落ちた時の衝撃と、その上部で大型重機が作業で行き来することによって遺構が著しく破壊される可能性があった。また、建物の解体をおこなう前の段階での発掘調査は、薄暗く密閉された環境となり安全性の確保と土の識別が困難になると考えられた。そこで協議の結果、1階の床に穴を開け地下にクッション材として碎石を1階のレベルまで敷き上部を解体した後に、基礎付近の碎石を除去しブレーカーを取り付けたミニバックホーでフーチングを削って撤去することとなり、土は触らずに遺構は現状保存することとなった。

Ⅱ区のu~z-10・11・12グリッド箇所は建物の庇部分にあたり、u~z-1~9グリッドと構造が異なっていた。旧管理棟と同様に梁までは削平を受けているが、梁がフーチングの下部より0.7m程上部についていることから土の残りが非常に良く基礎を撤去するためには包含層に影響があったため発掘調査をおこなった。この箇所からは竪穴建物2基、溝4条、道路遺構1条、土坑1基、ピット複数基を検出した。遺物は古墳時代後期~平安時代の土師器や須臾器・近世~近代の陶磁器、獣骨を検出した。その量は深コンテナ2箱に及んだ。

Ⅲ区は恵和会の建物北西端から3mのところ西側に1.5×1.5mの範囲を地表下-1.15m掘削したが全て山砂内におさまった。遺構・遺物の検出はなかった。

写真98 C1グリッド作業風景（南西より）



写真99 E～G-1, FG-0グリッド遺構検出状況(南東より)



写真100 DE-4・5グリッド樹木伐根作業風景(北東より)



写真101 CDEFG-6・7・8区立会南側掘削状況(東より)



写真102 SI-7～9区 観察池箇所掘削状況(南より)



写真103 北側井戸箇所建物北側壁撤去作業風景(東より)



写真104 南側スロープ掘削状況(北より)



写真105 南側花壇箇所掘削状況(北より)



写真106 調査区全景(南より)



写真107 外来臨床研究棟（東）柱③掘削状況（南東より）



写真108 臨床研究棟 v -14, 15区掘削状況（西より）



写真109 III区土層断面（北東より）



3.（本荘北）西病棟他災害復旧工事（ブロック塀復旧）に伴う立会調査（1714）

<調査期間>

20017年9月28日

<調査面積>

56.50㎡

<調査員>

大坪志子。

<調査概要・結果>

本荘北地区のブロック塀の改修・普及工事である。3地点で試掘をおこなった。

A地点は、北地区敷地の北西隅で、隣地は民間の駐車場である。南北19.9mの工事範囲の中央付近に約0.8×2.0mのトレンチを設定して掘削した。アスファルトの下は地表下0.36mまで碎石が、地表下0.5mまでは白川の洪水砂と考えられる砂層であった。既往の調査で、周辺の層序は砂層と土層の互層であり、混砂土層が堆積していることが分かっている。本工事において埋蔵文化財に影響はないと判断した。遺構の検出や出土遺物はない。

写真110 A地点作業風景（北より）



写真111 A地点掘削状況（北より）



写真112 A地点東壁土層断面（西より）



B地点は本荘北地区看護師寮東側に位置する。ここでは、ブロック塀の支柱の改修をおこなう。2箇所について確認をおこなった。北側の支柱(B-1)は基礎がほぼ地表の露出しており、この上部で改修工事をおこなうこととなり、掘削は伴わないことを確認した。南側の支柱(B-2)は、支柱の周囲 $0.45 \times 0.6\text{m}$ の範囲を地表下 0.3m まで掘削した。この範囲では、底にコンクリートの基礎が見えており、掘削内である。この範囲で施工するもので、埋蔵文化財に影響はない。

写真113 B地点作業風景(北より)



写真114 B-1地点掘削状況(西より)



C地点は、第一立体駐車場の東側に位置する。5箇所ほど改修する支柱のうち中央の箇所と、塀本体沿いに1箇所試掘をおこなった。

支柱の周囲 $0.5 \times 0.9\text{m}$ の範囲を地表下 0.65m まで掘削した。下にはコンクリート基礎が見えた。支柱の南側にはコンクリートはなく、基礎の南端に支柱を置いた格好である。今回の工事では、このコンクリート基礎をそのまま利用することを確認した。

塀沿いに $0.4 \times 0.9\text{m}$ の範囲を地表下 0.75m まで掘削したが埋土は砂であった。

敷地の南東隅も工事を予定していたが、基礎が地上に

写真115 C-1地点作業風景(西より)



写真116 C-1地点掘削状況(西より)



露出しており掘削の必要がないことを当日確認した。

本工事による埋蔵文化財には、影響がないと判断した。

Ⅱ-4 本荘中地区

(図6参照)

1. (本荘中) 本荘中4他災害復旧工事(ブロック塀復旧)に伴う立会調査(1704)

<調査期間>

2017年5月23日

<調査面積>

44.10㎡

<調査員>

吉留 広・土野雄貴。

<調査概要・結果>

熊本地震の影響で駐輪場西側のブロック塀が傾いたため、その復旧工事に伴う立会調査である。工事は既設基礎コンクリートを活かし、新たに鉄筋で連結させた擁壁と控壁を設置するものである。掘削は医学部弓道場の北西側に位置する通路から、北側に17.6m、南側に15.0mで幅0.5mの余掘部分と、18箇所の基礎部分があった。南北に細長い調査区で掘削深度が地表下1.0m以内におさまる計画であったので、まず基礎部分の3箇所を掘削し、土の様子を見ながら掘削を広げていく方法をとった。掘削した基礎の箇所は、北側から3番目・9番目・15番目で、北側からNo①～③と番号を付し順に説明する。

No①は医学部弓道場北西側の通路より北側に13.5mの位置を、幅1.20×0.60mの範囲で深さ地表下0.75m掘削した。途中深さ地表下0.25m、ブロック塀から東側に0.25mのところに電線管を、さらに0.30mしたから水道管を検出した。ブロック塀際であったことから、電線管・水道管が通っていたことからすべて攪乱埋土内におさまった。遺構・遺物の検出はなかった。

No②は医学部弓道場北西側の通路より北側に3.9mの位置を、幅1.2×0.8mの範囲で深さ地表下0.85m掘削した。途中深さ地表下0.7m、ブロック塀から東側に0.3mのところに水道管を検出した。すべて攪乱埋土内におさまった。遺構・遺物の検出はなかった。No③は医学部弓道場北西側の通路より南側に8.15mの位置を、幅1.2×0.8mの範囲で深さ地表下0.75m掘削した。ここでも深さ地表下0.65m、ブロック塀から東側に0.35mのところに水道管、さらにすぐ下から鉄管を検出した。すべて攪乱埋土内におさまった。遺構検出はなかったが、攪乱埋土内より土師器片を1点検出した。

No①～③の状況を見ると調査区に包含層の影響はないものと判断した。工事は慎重に進めるように指示し調査を終了した。

写真117 No①作業風景(南東より)



写真118 No①掘削状況(南より)



写真119 No③掘削状況(北より)



2. (本荘中) ライフライン再生工事に伴う立会調査 (1706)

<調査期間>

2017年6月1～12・15・16・19・20日、7月3・5・13・14・21・27・28日、8月8・29～31日、9月1・5・6・8・11～13・20・21・26・28・29日、10月3・5・10・13・18～20・26・31日、11月1・13日

<調査面積>

789.35㎡

<調査員>

土野雄貴・吉留 広・大坪志子

<調査概要・結果>

本荘中地区における排水設備整備に伴う工事立会である。浸透枿・浸透井戸設置に伴う掘削が特に深く、過去の調査成果から埋蔵文化財に対する影響が想定された。6月6日、遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。

本荘中7(共用棟本荘1)と本荘中サークル棟3の間を通る構内道路下を主たる掘削対象とする一連の調査区である。掘削の着手順に調査区を1・2・3…と順番で割り振り、必要に応じて小区を設け細分した。

1区は消火管取替に伴う掘削である。医学部ポンプ室の裏を1.0×1.4m掘削した1aでは地表下0.35mでポンプ室の基礎を、地表下0.6mで既設配管を確認した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。この配管の延伸状況を確認するための1bは、1.0～1.3m×12.5mを掘削した後、既設構造物を迂回しながら10mほど北へ向かい構内道路に達する。地表下0.4～0.6mで既設配管を確認した。現代埋土にとどまるが、土師器・須恵器片が数点出土した。遺構は確認されていない。交換後の消火管は撤去せず、そのまま埋置されることとなった。

2区は消火管取替・浸透側溝設置に伴う掘削である。ポンプ井戸の北隣を0.7×1.4m掘削した2aでは、地表下0.2mで医学部旧ボイラー室とみられる建物の基礎を確認した。基礎の厚みは0.3m、下位は現代埋土である。基礎の脇、地表下0.3mで電気ケーブルを確認した。掘方埋土の範囲にとどまり遺跡への影響はなかった。さらなる延伸状況を確認するための掘削である2bは、東へ1.2m掘削した後北へ折れ、3m掘削した後東へ5.6m掘削した後クランク状に折れ曲がった後3.5mほど進む。地表下0.4～0.65mにかけて鉄管を検出した。現代埋土にとどまり遺構は確認されなかった。2b掘削中に検出した別の鉄管の延伸状況を確認するため0.6×12mにわたって掘削したのが2cである。鉄管は地表下0.4～0.5m

にかけて検出されたが、そのまま埋置されることとなった。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されていない。2dは構内道路の西隣を1.0×18m掘削した。北端には、本荘中7と本荘中サークル棟3を繋ぐ共同溝が設置されていた。地表下0.6m付近で既設管を検出した。すべて現代埋土である。2b北3.6m地点で既設管下からレンガを伴う建物基礎を確認した。熊本医学部の前身である大正元年(1912)発足の私立熊本医学専門学校、もしくは昭和9年(1934)発足の熊本医科大学に伴うものである可能性が高い。2d底部を地表下0.8mまで掘削した2eでは、近代整地層を確認したが遺構は認められなかった。交換後の消火管は撤去せずそのまま埋置されることとなり、浸透側溝が設置された。2bと一部重なるように掘削した2fは既設配管設置状況確認のための1.2×3m、地表下0.9mの掘削である。現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。

3区は既設配管の敷設状況確認に伴う掘削である。2×2mを掘削したが既設の配管を確認することができず、地表下0.88mまで掘削したところで作業中止となった。現代埋土にとどまり遺構は確認されなかった。

4区は消火管および水道管取替に伴う掘削である。既設配管埋設状況確認に伴い2×2mを掘削した4aでは地表下0.35mで消火管、地表下0.45mで水道管を検出した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。4aの中心から約1m幅で7mほど南へ下り、東へ曲がって10区北へつながる4bでは、地表下0.96mまで掘削したが近代整地層にとどまる。交換後の消火管は撤去せず、そのまま埋置されることとなった。

5区は雨水管・浸透側溝敷設に伴う掘削である。雨水管敷設に伴う5aは1.1×2.0mを掘削した。地表下0.87～0.95mまで近代整地層、地表下1.3mまで近代整地層であった。下位から包含層を確認したが、調査区中央付近から近代建物基礎が検出された。基礎掘方の外側では地表下1.49m付近で地山に至るが、建物基礎以外は確認されなかった。遺物は土師器細片が出土している。浸透側溝敷設に伴う5bは1.8×1.8mの掘削である。地表下1.2mで包含層を確認し、地表下1.4m付近でビット2・小土坑1を検出した。

6区は雨水管敷設に伴う1.2m×11mの掘削である。2dと同じ北端には共同溝がある。地表下1.15mで包含層を確認し、5b北8mあたりから地表下1.5mで堅穴建物とみられるプランを検出した。一部を近代建物基礎の掘方に切られるが、隅丸形状の2軒が重なり合っているとみられる。大半は調査区外へ広がるとみられること、掘削が下位に及ばないことから詳細は不明である。堅穴建物の一部を検出した1233調査区は約12m南西に位置す

る。新設された雨水管と11・12区で新設された浸透側溝とを繋ぐための6bは、雨水管上0.9×2.7mを地表下1.3m、11区浸透側溝0.9×0.9mを地表下0.3m、12区浸透側溝0.9×0.9mを地表下0.5m、それぞれ掘削した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

7区は雨水管設置に伴う1.2×5mの掘削である。共同溝を挟んで6区の北側に位置する。地表下1.4mで近世包含層を確認した。遺構は確認していない。共同溝の北2.5m付近を0.6×3m、地表下0.4m掘削した7bは、11・12区で新設された浸透側溝と7区で新設した雨水管とを繋ぐための掘削である。現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。

8区は、9a設置予定の浸透樹と、11m東の既設雨水管とを繋ぐ雨水管設置に伴う掘削である。8aは0.8×1.1mを掘削し、地表下0.45～0.65mにかけて複数の既設配管を検出した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。9a浸透樹の位置変更に伴い再掘削した8bは、0.8～1.2m幅を約10m掘削した。浸透樹の設置場所変更に伴い西端が約2m南へずれ、東半分の大半は8aと重なる。西側から地表下1.3m付近で近代掘方を検出した。

9区は浸透樹・雨水管設置に伴う掘削である。1.8×1.8mを掘削したが(9a)、あまりにも多数の配管が集中して樹の新設が困難であったことから、予定地点から2mほど南にずらし、7区内に設置することとなった(9b)。1.2×1.2mを地表下1.8mまで掘削したが近世包含層にとどまり遺構は見られなかった。

10区は消火管設置に伴う掘削である。共同溝から9区までの1.1×6mは浸透側溝設置箇所と重なる。地表下0.39～0.67mにかけて既設配管を確認した。現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。9区東端で分岐する。本荘中6へ取りつくため3.5m東へ進んだ後北へ3.5m進む幅0.8m、地表下1.0mの掘削は一部が8aと重なる。4bとつながる。消火管盛替えに伴う配管露出のための0.8×1.95m、地表下1.0mの掘削では、現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。

11区は浸透側溝設置に伴う掘削である。共同溝を起点とした11aは1.0×1.75mを掘削した後、既設樹の外縁を回り込んで11bに至る。迂回した既設樹を起点とした11bは1.0×1.75mを掘削した。それぞれ地表下0.8mを掘削し、5m地点から地表下0.6mで、14m地点から地表下0.5mで近代建物基礎を検出した。

12区は浸透側溝設置に伴う掘削である。5b隣を起点とした12aは1.2×1.2m、地表下0.8mの掘削である。南側5mの範囲で近代建物基礎をいくつか検出した。最も

南に位置するものは5b東壁で検出したものと同一である。12bは共同溝を起点とした1.1×20m、地表下0.8mの掘削である。9区隣までは10区と重なり、6m付近で8区を一部横断している。遺構は確認されなかった。

13区は浸透側溝設置に伴う掘削である。12b北端を起点に1.2×17.5m、地表下0.8mを掘削した。起点から8m付近において、最も浅いところでは地表下0.3mで近代建物基礎が検出された。タイルレンガ・大理石風洗い出しによる外観を確認でき、かなり良好な状態であった。基礎の東側地表下0.74mには幅0.8mの犬走りがある。

14区は構内道路の舗装やり替えに伴う地表下0.3mの路床掘削である。共同溝南側について立会を実施したが、現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。この結果を受け、北側については慎重工事を指示した。

15区は浸透樹・雨水管設置に伴う掘削である。0.8×2.2mを掘削した15aでは地表下1.5mで地山を確認したが、15aのすぐ脇を1.8×1.8m掘削した15bでは地表下1.2mで包含層を確認し、地表下1.34mで溝を検出した。東壁でビットに切られていたほか、南壁でもビットを検出している。溝は西隣の15cにも続いており、1.2×2.5mの調査区をやや北に寄りつつ横断していたほか、調査区南側から別の溝が合流する状況を検出した。このほか、北壁の一部に栗石を確認しており、敷地西端の擁壁掘方から近代建物基礎の一部を出土した。

16区は浸透樹・雨水管設置に伴う掘削である。0.8×2.0mを掘削した16aでは地表下1.7mで地山を確認した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。1.8×2.1mを掘削した16bでは地表下1.4mで包含層、地表下1.5mで地山を確認した。遺構は確認されなかった。

17区は浸透樹・雨水管設置に伴う掘削である。道路を横断するように0.8×2.2mを掘削した17aから地表下0.55mでコンクリート製の地下水槽を検出したため、道路に並行するよう西側を0.8×2.3m掘削したが地下水槽は続いており、北へ5mほどずらすよう変更された(17b)。17bは1.6×1.6mを掘削した。地表下1.0mで包含層を確認し、地表下1.2mで、中央を約1m幅の溝に切られる2.5m幅の硬化面が検出された。17b東隣を1.0×3.5m、地表下0.9m掘削した17cからはレンガ製の側溝と樹を検出した。これ以外の遺構・遺物は確認されなかった。

18区は浸透樹・雨水管設置に伴う掘削である。0.8×2.3mを掘削した18aは現代の廃棄土坑を検出した。地表下1.0～1.4mでは炭の混入が著しく、焼土とともに試験管・実験器具の一部などを多く含んでいた。1.8×1.8mを掘削した18bではこの廃棄土坑の続きのほか、南側から地表下1.0mで包含層を確認し、地表下1.3mでビット

を2基検出した。18bの西側、 $1.5 \times 3.5\text{m}$ を掘削した18cからは、17bで検出した道路と溝の続きを検出した。

19区は浸透井戸設置に伴う掘削である。 $0.6 \times 3.8\text{m}$ を掘削した19aは地表下1.58mまで現代埋土だったが、その下からかなり発達した酸化鉄層を伴う溝の一部が検出された。 $2.2 \times 2.2\text{m}$ 、地表下3.3mを掘削した19bでは酸化鉄層の広がりがさらに確認され、その幅は少なくとも3.8mを数える。ほかには、その溝を切る土坑が検出された。遺物の中に刻名のある粘板岩片があり、個人用の黒板とみられる。裏面には日章旗が彫りこまれており、戦中期の所産かもしれない。地表下2.2~3.3mはよくしまる灰黄色土・黄灰色土で遺構・遺物は確認されなかった。19cからはこのほか近代の石組と、石組に切られる溝が検出された。

20区は雨水管設置に伴う $1.0 \times 18.3\text{m}$ の掘削である。地表下1.25mで包含層を確認し、15bの北6.3mあたりから土師器をまとめて出土した。包含層掘削後、地表下1.5m付近で検出したプランからは少しずれており、断面を精査したところ、溝とみられる掘方埋土中に位置していたことを確認した。このほかピット4・土坑4をそれぞれ検出したが、掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。

21区は雨水管敷設に伴う掘削である。15aを起点に $1.2 \sim 1.3\text{m} \times 20.6\text{m}$ 掘削した。起点から7.5m地点において地表下0.3m付近で近代建物の一部が検出された。状態がきわめて良好である。タイルレンガと大理石風洗い出しによる外観を呈し、建物の西側には幅0.8mの犬走りがあり、13区検出のそれと対をなすと考えられる。同建物の下位、地表下1.0~1.2mで包含層を確認し、地表下1.2mで15区検出の溝の続きのほか、溝を切るようにピット1・溝1・土坑1、切り合わないピット1を検出している。

22区は、16区に設置される浸透溝と、21m東側にある既設雨水樹とを接続する雨水管敷設に伴う掘削である。22aは $1.0 \times 7.0\text{m}$ 、地表下0.7mを掘削したところで既設雨水樹に当たる。この樹を起点に少し向きを変えて $1.0 \times 12\text{m}$ を地表下0.6m掘削したが、終点部分に雨水樹を新設するよう設計変更されたため $1.7 \times 1.7\text{m}$ 、地表下1.0mを22bとして掘削した。地表下0.82mで近代整地層を確認している。22aの途中にある雨水樹と本荘中4南西隅にある雨水樹とを繋ぐための22cは、 $0.8 \times 2.0\text{m}$ を掘削した。地表下0.5mで既設配管を検出し、その高さで雨水管を新設することになった。22bで近代建物基礎の一部とみられる若干の栗石とコンクリート片を出土したが、すでに擾乱を受けており出土状況は良好でなかった。

これ以外の遺構は認められなかった。

23区は雨水管敷設に伴う掘削である。17bと18区の間、 $1.2 \sim 1.4 \times 5.1\text{m}$ を掘削した23aは、地表下1.1mで包含層を確認し、地表下1.2mで17b検出の道路跡の続きを検出した。18区と19区の間を $1.2 \sim 1.3 \times 2.6\text{m}$ を掘削した23bでは、19区の南1.5m付近までヒューム管の掘方が調査区東側で平行する。19区南12m付近から包含層は地表下1.3mに下がる。17~18区間は現代の廃棄土坑が2基認められ実験器具を主体としたガラス製品が大量の炭とともに埋められていたが、少し北に離れたところからプラスチック製メガネフレームが大量に出土した。実験器具の一種なのだろうか。18区の北2m付近では地表下0.9mで包含層を確認し、地表下1.03mで硬化面を検出した。18区の北7m付近からは地表下1.3m付近で包含層を確認し、地表下1.35m付近で溝を検出した。約1.8m幅で、調査区を斜めに横切っている。23区に新設した雨水管と、27区で新設された浸透溝を繋ぐための23cは、18区の北5m付近を $1.0 \times 1.2\text{m}$ 掘削した。地表下1.35mで包含層を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。同様の23dは19区南隣の $1.26 \times 0.84\text{m}$ を地表下1.28m掘削したが、現代整地層にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

24区は雨水管敷設に伴う $1.2 \times 5\text{m}$ 、地表下1.4mを掘削した。当調査において最も北に位置する。近代整地層にとどまり、調査区南壁の一部に栗石が認められた。

25区は敷地西端の樹根13本の撤去に伴う掘削である。南から順に①、②…とした。大半の樹根はすっかり枯れてしまっており、掘削することなく撤去することができた。⑧は $2.5 \times 3.8\text{m}$ 、⑨は $1.7 \times 2.0\text{m}$ をそれぞれ地表下1.0mまで掘削したが、硬くしまった現代整地層に沿うような根の入り方だったため、下位へ影響を及ぼすことなく抜根できた。遺構・遺物は確認されていない。

26区は構内道路東側の浸透溝設置に伴い $1.3 \times 21\text{m}$ 、地表下0.8mを掘削した。西側0.3mはヒューム管掘方と重なる。21区で確認された近代建物の続きが検出されることを想定していたが、新制熊本大学医学部校舎建設の際に破壊されていることを確認した。北側では大量の焼土と瓦片を伴う土坑が検出され、空襲ガレキの廃棄土坑とみられる。これ以外の遺構は確認されなかった。

27区は構内道路西側の浸透溝設置に伴う掘削である。15区から19区までの約71mを 1.3m 幅、地表下0.8m掘削した。現代埋土にとどまるが、23aの西側から栗石とともに近代建物基礎の一部を出土した。装飾タイル面が下に向いており原位置は留めていない。

28区は、26区と27区を繋ぐ掘削である。15区の北0.5m地点を $0.8 \times 5.08\text{m}$ 、27区側は1m北で合流する。地表

下0.5m掘削したが、現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

29区は、新設された雨水管を本荘中4（旧医学部講義棟）北西隅の雨水井に接続するため0.66×4.25mを地表下0.66～1.05m掘削したが、現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

いずれも狭い調査区であったが、本荘中地区の西側における遺構の様相について部分的ながらさらなる知見が得られた点は成果であったといえよう。

写真120 24区作業風景（南西より）



写真121 15c区溝遺物出土状況（南より）



写真122 19b区溝・土坑検出状況（北より）



写真123 21区近代建物検出状況（北西より）



3.（本荘中）ガス整圧器電源設置に伴う電源引込のための建柱工事に伴う立会調査（1709）

<調査期間>

2017年7月20日

<調査面積>

0.9㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

既設のガス整圧器に外部から電源を確保するための電柱を敷設する工事に伴う立会調査である。

0.3×0.3mのうち大半は地表下0.4mまでの掘削で、現代埋土にとどまる。掘方中心の直径0.15m部分のみ地表下1.0mの掘削で遺跡への影響が想定されたものの、掘方が極端に狭いため掘削排土の確認によって影響の有無を判断することとした。地表下0.5mからコンクリート片・レンガ片・瓦・礫が出土した。地表下0.7mから山砂が混じりはじめ、地表下0.8mからは山砂の割合が増える。地表下0.99mから褐色砂質土が上ってきたが、しまりはなく不揃いな土質で攪乱されているとみられる。遺物は含まれず、遺跡への影響はないと判断し立会を終了した。

写真124 作業風景（南西より）



写真125 掘削完了状況（西より）



4.（本荘中）ライフライン再生工事（駐輪場取設）工事に伴う立会調査（1722）

<調査期間>

2017年11月22・24日

<調査面積>

61.20㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

（本荘中）ライフライン再生工事の関連工事の一つで、老朽化した駐輪場の新営に伴う工事立会である、先に実施していた1706調査と一部重なる。

基礎新営地点18箇所のうち3箇所について立会を実施した。①は0.95×1.67mを掘削した。地表下0.78mで現代整地層を確認し、近代建物基礎片を出土した。原位置は保っていない。遺構は確認されなかった。

②は0.9×1.7mを掘削した。地表下0.73mで現代整地層を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

③は1.2×2.0mを掘削した。地表下0.83mで現代整地層を確認した。遺構・遺物は確認されず、熊本医学専門学校・熊本医科大学時代の建物配置図とも重なりがない

写真126 調査区近景（南より）



写真127 ②作業風景（南より）



写真128 ②掘削完了状況（東より）



ことから、残りの箇所については慎重工事を指示して立会を終了した。

5. (本荘中) 本荘中2他工作物災害復旧工事に伴う立会調査 (1733)

<調査期間>

2018年3月12日

<調査面積>

1.85㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

損傷していた実験排水管を交換するための工事立会である。

底辺1.83m、高さ1.65mを凸字状に掘削した。地表下0.35mで排水管を検出した。管下0.1mまで掘削し、地表下0.6mで既設水道管を検出した。現代埋土にとどまり遺跡への影響はなく、これ以上の掘削はないことを確認して立会を終了した。

写真129 調査区近景 (東より)



写真130 掘削完了状況 (東より)



II-5 大江地区 (薬学部) (図7参照)

1. (大江北) 薬学部根株除根業務に伴う立会調査 (1705)

<調査期間>

2017年5月30日

<調査面積>

41.3㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

本事業は、平成27年の台風15号によって倒れるなどの被害を受けた樹木を撤去するものである。

大学院実験棟南側の緑地に植栽されている9本の樹木が対象で、樹木は既に上部を伐採して切株の状態であり、撤去作業をおこなった。

作業は、西側に位置する申請図の樹木⑨からおこなった。いずれも、切株の周囲の土を浅く除去し、重機のバケツを引っかけて転がすようにすると簡単に除去でき、いずれも埋土内でおさまった。撤去によってできる凹みは、2×2m前後で、深さは0.3~0.6mである。樹木⑤

写真131 樹木⑨作業風景 (南東より)



写真132 樹木⑨撤去状況 (南東より)



図7 大江地区（薬学部）における調査地点配置図（1/2000）

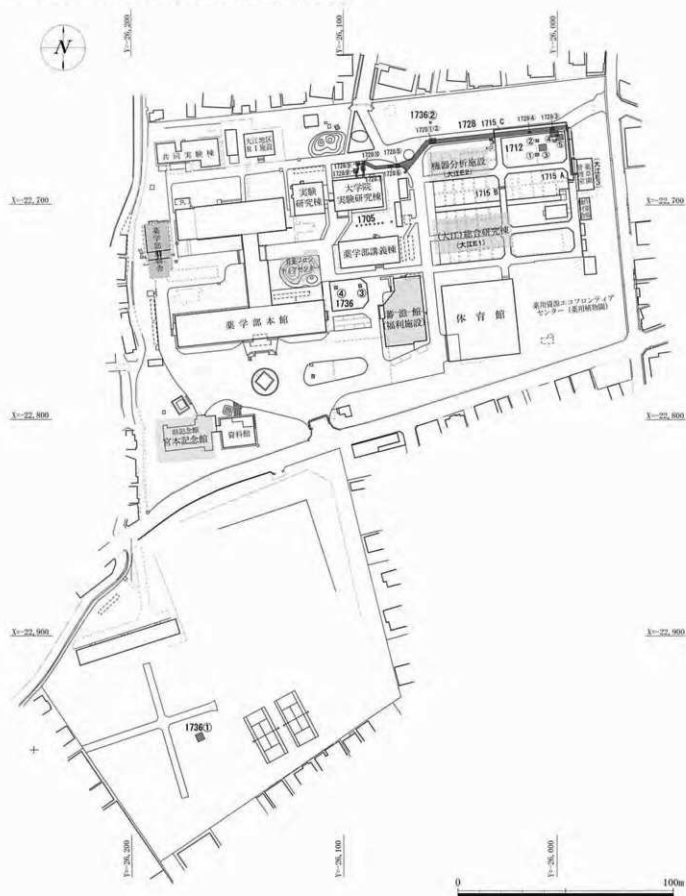


写真133 樹木⑦作業風景（南東より）



写真134 樹木⑦撤去状況（南より）



写真135 樹木③撤去状況（南より）



写真136 樹木①撤去状況（南より）



は、根が張り簡単には動かすことができなかったため、最後に作業をおこなった。周囲を0.45m程度掘削し、根をカットしながら切株を引き上げた。

いずれも遺物包含層や遺構面に達することはなく、遺物の出土もなかった。

2.（大江北）イノベーションセンター新営に伴う 支障樹木伐採除根業務に伴う立会調査（1712）

<調査期間>

2017年9月12日

<調査面積>

27.8㎡

<調査員>

大坪志子。

<調査概要・結果>

本事業は、イノベーションセンター新営に伴い、支障となる樹木を撤去するものである。今回はA～D（申請園中）の5本の樹木の撤去をおこなった。作業は、樹木上部を伐採して切株の状態にしてから始めた。

①地点（樹木E）は、重機のバケットで株を引っ張り、転がすようにして撤去した。掘削は伴わなかった。除根後の凹みは1.4×1.8m、深さは0.2m程度である。

②地点（樹木D）も、重機でひっぱり転がすようにして撤去した。除根後の凹みは1.3×1.5m、深さは0.5mである。底の一部で地山に類似した土壌を確認した。

③地点（樹木C）は、樹木の西側と東側を掘削したのちに、重機で引き上げた。除根後の凹みは3×3.5m、深さは0.7mである。樹木の直下で古代の遺物包含層に類似する黒色土が確認できたが、最も深い⑤地点では確認できなかったため、真偽については慎重を期したい。

④地点（樹木B）は、重機で転がすようにして撤去した。除根後の凹みは1.3×1.5m、深さ0.4mである。

⑤地点（樹木A）は、南側、東側、北側を重機で掘

写真137 ①地点作業風景（西より）



削して重機で引き上げた。除根後の凹みは3.2×2.6m、深さは0.8mである。地表下0.7m付近から砂質の層を確認した。

②地点の底部で地山に類似する土壤を確認したほかは、遺物包含層や地山の検出はなく、遺物の出土もなかった。いずれも、埋土中でおさまった。

写真138 ①地点撤去状況（西より）



写真139 ⑤地点撤去状況（東より）



3. (大江北) イノベーションセンター新営に伴う 支障配管替え工事に伴う立会調査 (1715)

<調査期間>

2017年10月11, 13日

<調査面積>

215.60㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

イノベーションセンター新営に伴い支障となる配管の位置を変える工事である。工事地点は3箇所あり、それぞれA～C地点とした。

A地点は、大江E3建物前の道路を南北に走る水道から、道路を横断するように東側へ水道管を繋ぎ、そのま

ま建物沿いに北へ伸ばし、建物北にある既設管に繋ぐ工事である。東西は幅0.6m、南北は幅0.36m、深さは地表下0.75～0.8mで掘削した。東西間の西端では電気配線、南北間の北端では電気配線3本と水道管3本が検出されたが、それらの上を通すこととし、掘削はすべて埋土内におさまった。一部、本庄遺跡や黒髪町遺跡群で確認する遺構面の土と類似する土層部分を確認したが、遺構は確認されなかった。

写真140 A地点作業風景（北より）



写真141 A地点掘削状況（北より）



写真142 A地点南部掘削状況（東より）



B地点は、薬草園の畑をはさんでA地点の反対側に位置する。既往の工事設計図では、ここで東の畑へ伸びる管と北へ伸びる管とに分岐していることになっており、東へ伸びる管を分岐点で切断する工事が予定された。予定箇所を掘削すると、予定ではクランク状になった水道管が検出されるはずであったが、一直線に東西に走る水道管で、北への分岐した管は確認できなかった。このため、ここでの予定工事は断念した。この掘削は既設管の掘方内で埋蔵文化財への影響はなかった。

写真143 B地点作業風景（北より）



写真144 B地点掘削状況（東より）



C地点は、大江E2建物の北東隅からガス管を繋ぎ、道路の北端を通して東側で再度繋ぎ変えて、ガス管を北側へ迂回させる工事である。地表下0.7~0.75mまで掘削した。西側から掘削を開始した。途中、地表下0.6mで包含層かと思う綺麗な土層が検出されたが、古代の遺物が含まれず、瓦やガラス片が含まれており、近代の土層と考えられた。掘削はこの土層までで、埋蔵文化財への影響はなかった。

写真145 C地点西半掘削状況（東より）



写真146 C地点東半掘削状況（東より）



4. (大江北) 自然共生型産業イノベーションセンター新営に伴う支障配線替工事に伴う立会調査 (1728)

<調査期間>

2018年2月19日・27日, 3月1・9日

<調査面積>

300.54㎡

<調査員>

土野雄貴・吉留 広

<調査概要・結果>

自然共生型産業イノベーションセンター新営に際し、支障となる配線の盛替えに伴う工事立会である。掘削の深いハンドホール設置箇所予定地点を中心に立会を実施した。

①②は大江E2（機器分析施設）の横2.3×3.3mを掘削した。地表下0.7mで近代整地層、地表下1.21mまで掘削したが近代整地層にとどまる。遺構・遺物は確認されなかった。

③は東門の西側23m付近を1.6×1.9m掘削した。地表下0.8mで近代整地層、地表下1.3mまで掘削したが近代

整地層にとどまる。遺構・遺物は確認されなかった。

③の西8.6m地点を④として1.9×1.6m掘削した。埋設管路設置予定区間である。地表下0.9mまで掘削したが現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

⑤は大江C3(大学院実験研究棟)とE2(機器分析施設)の中間付近を1.9×2.0mを掘削した。北東隅の一部に道路緑石がかかるため残したが、その下地表下1.1mから栗石を検出した。近代建物基礎に伴うとみられる。地表下1.35mまで掘削したが近代整地層にとどまる。

⑤の西0.5mを1.5×2.3m掘削した⑥では、地表下0.85mで0.9×0.9mの近代建物基礎が検出された。独立基礎とみられる。地表下1.25mまで近代整地層、地表下1.34mまで近世埋土である。北東側に白粘土分布、南東隅に黒褐色土を検出したが、掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。

⑦は大江C3の北側を2.0×2.0m掘削した。地表下0.71mで近世包含層を確認したが、既設の配線配管が支障となりハンドホール設置は困難であるとして、地表下0.8m掘削したところで中止となった。陶磁器片など数点を出土した。

⑦の西0.8mを1.95×1.95m掘削した⑧は、地表下0.5m掘削したところで既設配線が支障となり掘削を中止した。現代埋土にとどまり遺跡への影響はなかった。

⑦の北0.3mを1.7×1.4mを掘削した⑨は、⑦の変更先である。地表下0.93mで北側に近世包含層、南側に現代埋土を確認した。建物基礎撤去後の掘方とみられる。

⑩は1.7~1.9×1.2mを掘削した。⑧の変更先である。現薬学部北門の後背に位置している。調査区南側から地表下1.2mで建物基礎を検出した。中心付近に北へ5cmほど張り出す箇所がある。基礎の北側は地表下1.28mまで掘り下げたが掘方は確認されず、近代整地層にとどまる。

上記以外の遺構・遺物は確認されず、配管部分の掘削

写真148 ⑥近代建物基礎検出状況(南より)



写真149 ⑩近代建物基礎検出状況(東より)



はハンドホールより上位でとどまる旨を確認したところで、残りの箇所については慎重工事を指示して立会を終了した。

本地区には明治42年(1912)、薬学部の前身として私立熊本薬学専門学校が建設されており、今回検出した基礎は当該時期の建物基礎である可能性が高い。

5. (大江北・南) 樹木移植に伴う立会調査(1736)

<調査期間>

2018年3月26日

<調査面積>

28.25㎡

<調査員>

山野ケン陽次郎

<調査概要・結果>

大江北・南地区の樹木各1本を薬学部講義棟南の緑地に移植する作業に係る立会を実施した。大江北地区で抜根箇所と移設箇所の3カ所、大江南地区で抜根箇所1カ所の掘削をおこなった。大江南地区のサンシュユ(①)は周囲を3.4×3.5m、地表下0.7mまで掘削し、最下でやや締まりの強い黒褐色土を検出したが、遺物などは出土

写真147 ①②調査区近景(西より)



せず、全て現代埋土内におさまった。大江北地区のモクゲンジ(②)は周囲を直径1.1mの円形に掘削し、地表か0.4mまで掘削したが、全て現代埋土中でおさまった。大江北地区のサンシュユの移設先(③)は1.4×1.5m、地表下0.6mまで掘削した。掘削は現代埋土内におさまり、埋土中から手抜き成形の赤煉瓦を1点取り上げている。モクゲンジの移設先(④)は施行深度が0.35mと浅く、文化層に達する見込みがないため、工事業者に掘削につ

写真150 サンシュユ抜根重機掘削作業風景(北より)



写真151 サンシュユ樹根掘削状況(北より)



写真152 モクゲンジ抜根人力掘削作業風景(北より)



写真153 モクゲンジ樹根掘削状況(北より)



写真154 サンシュユ移植箇所掘削状況(東より)



いて指示を出し、立会を終了した。遺構は検出されず、遺物として赤煉瓦1点を持ち帰った。

Ⅱ-6 京町地区

(図8参照)

1. (京町) 教育学部附属小学校管理棟新営に伴う 支障配管工事に伴う立会調査 (1702)

<調査期間>

2017年4月17日～4月27日

<調査面積>

43.85㎡

<調査員>

大坪志子・土野雄貴・吉留 広

<調査概要・結果>

熊本地震で被害を受けた教育学部附属小学校管理棟の建て替えに際し、支障となる配管の盛替えに伴う工事立会である。小学校管理棟と小学校校舎A棟の間にある中庭付近の掘削をA地点、小学校正門から北へ延びる構内道路付近の掘削をB地点とした。4月20日、遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。

A地点は給水管・ガス管盛替えに伴う掘削である。小学校管理棟西側の構内道路から小学校校舎A棟に至るまでの①と、管理棟と校舎をつなぐ渡り廊下に接する②に

分かれる。

①は、構内道路部分1.95×2.8mのうち、既設柵を避けた南西隅0.9×0.9mを残して掘削した。掘方の南側から地表下0.7mで埋設状況を確認できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。中庭部分は、既設柵を避けながら東へ4.5m、北に6m、地表下0.4mを掘削した。幅は0.3～0.8mとまちまちである。掘削は現代埋土内にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。②は、既設管敷設状況確認のため0.5×0.5mを地表下0.5m掘削したが、既設管は存在しなかった。掘削は現代埋土内にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

B地点は雨水管・污水管盛替えに伴う掘削である。8区に分けた。

1区は、小学校校舎A棟の東側にある既設雨水柵・污水柵から南東へ6.4m進む。最初の1mほどは雨水管と污水管の掘方が分かれているため0.6m幅だが、合流部分でやや広くなり、3m先からは1.0m幅となる。地表下1.0mで包含層を確認、合流部分付近から地表下1.1mでピット2基を検出した。

南に向きを覚えて15.7mほどの直線部分のうち、2.2mまでの2区では地表下0.95mで包含層を確認、地表下1.05mでピット2基を検出した。

図8 京町地区における調査地点配置図 (1/2000)



6.4mまでの3区、8.4mまでの4区は、それぞれ地表下1.1mで地山を確認し、遺構は検出されなかった。

11.2mまでの5区では地表下1.0mで包含層を確認、地表下1.2mでピット3基を検出した。

南壁に突き当たって2m西までの6区では地表下0.75mで包含層を確認し、地表下1.1mで硬化面の広がりを検出した。

小学校管理棟南の既設雨水枡までの7区では既設工事の影響が大きく、雨水枡の手前0.8mの北壁際、地表下1.4mでごく僅かに地山を確認できたにとどまる。

この既設雨水枡から再び南へ折れ、7.5m先で東へ曲がる8区は、0.7m幅を掘削した。地表下0.9mで包含層を確認し、4.5m南から地表下1.0mで焼土を伴う硬化面を検出した。地表下1.1mでは、この硬化面に切られる別の硬化面を検出した。調査区西壁にピットの断面が認められる。焼土を伴う硬化面は、調査区西壁で柱痕をとどめるピットに切られていた。

狭い調査区であったが、京町地区における集落の範囲がこれまで想定されていたよりも南東側に大きく広がることを確認できた点は成果であったといえよう。

写真155 A地点①掘削状況(西より)



写真156 B地点1区作業風景(北より)



写真157 B地点6区硬化面検出状況(東より)



写真158 B地点8区焼土検出状況(南より)



2. (京町) 教育学部附属小学校管理棟とりこわし 工事に伴う立会・発掘調査 (1707)

<調査期間>

2017年7月3日～8月28日

<調査面積>

582.01㎡

<調査員>

大坪志子・土野雄貴

<調査概要・結果>

2016年の熊本地震の被害を受けた教育学部附属小学校本館の立替工事に係る事業である。対象建物を取り壊す際に、基礎の間に遺跡が残存する可能性があることから、上屋を解体したのちに建物や階段等の基礎撤去前に立会及び発掘調査を実施した。また、同地点で新築工事の範囲が、旧管理棟の北・西・南に広がるため、新築に係る発掘調査範囲も同時に調査を実施した。

旧管理棟の基礎は、地中梁で大きく8つに分かれており、これを一区画として西から番号を付した。西側の①～③区画は遺物包含層が良好な状態で残っていたが遺物は少なく、検出された遺構はピット数個である。堅穴建

物らしき範囲もあったが、明確に判断できるものではなかった。④～⑧区画は、遺物包含層は削平されて残されておらず、遺構面も上面が削平されていた。ピットが数個と、⑦区画で南北の溝が1条検出されたのみである。

旧本館周囲では、旧管理棟の基礎（フーチング）工事の際に破壊された範囲を除くと、幅1m前後の狭長な調査区であった。もっとも擾乱が少ない地点では、地表面下0.3～0.4mで、遺物を含む赤褐色の土層が検出される。既往の調査では、黒色土層が古代の遺物包含層で、これ

写真159 ②区完掘状況（南より）



写真160 ⑦区掘状況（南より）



写真161 南外周5区土器出土状況（北より）



写真162 南外周5区完掘状況（北より）



写真163 南外周4区遺物出土状況（西より）



より以下を調査してきたが、褐色の土層は古代の遺物包含層の上位に0.6m前後堆積しており、古代の遺物を含む。ただし、含まれる土器片は碎片が多く、今後時期の精査が必要である。南側では古代の時と弥生土器が出土し、ピット・土坑・堅穴建物が検出された。堅穴建物は、壁を確認できるものがなく、全容の把握は難しかった。北・西側では、ピットが数個確認できたのみである。

3.（京町）工作物災害復旧工事に伴う立会調査（1719）

<調査期間>

2017年11月8・9日

<調査面積>

88.90㎡（9.645㎡を調査）

<調査員>

新里貴之。

<調査概要・結果>

附属小中学校敷地内の、熊本震災の影響で傾いたフェンスおよび民家と接するブロック塀傾斜を復旧するための工事に伴う立会調査を実施した。

附属中学校グラウンド北西隅境界部分のフェンス工事

は、新たにフェンスの支柱基礎部分を掘削する工事であり、計29か所の掘削予定であったが、数か所を掘削し、遺物包含層および遺構の確認された時点で周辺の掘削部を増やすという方法で調査を実施した。結果、9箇所を掘削し（A～I地点の順に掘削）、5箇所で遺物包含層および遺物小片を確認できた。以下、北から地点別に土層の様子と遺物について概略を記す。

B地点は最も北に位置し、幅1.5×0.8m範囲で深さ0.9mを掘削した。土層の残りは悪く、地表下0.56mで基盤ローム層（3層）を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

C地点はB地点から6m南に位置し、幅1.1×0.9m範囲、深さ0.9mを掘削し、地表下0.49～0.54mで基盤ローム層（3層）を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

A地点は、C地点より南に6m、東に1.5mの地点で大きなクランク部分に相当する、幅1.15×0.9m範囲、深さ0.85mを掘削し、地表下0.3mで黒色土層（2層）、地表下0.55mで基盤ローム層（3層）を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。

D地点は、A地点より10m南に位置し、幅1.2×0.9m範囲、深さ0.9mを掘削し、地表下0.3mで黒色土層（2層）を確認した。土層幅0.6mほどの厚みで確認されたものの、明確に分層ができず、また、遺構・遺物は確認されなかった。

E地点は、D地点より8m南の緩いクランク部分に位置し、幅1.5×0.9m範囲、深さ0.72mを掘削し、地表下0.24mで黒色土層（2層）を確認した。ここは2a層と2c層（地表下0.49m）に分層できたが、遺構は確認されなかった。遺物は2a層から土師器小片が2点出土した。

F地点は、E地点より6m南に位置し、幅1.2×0.9m範囲、深さ0.72～0.77mを掘削した。地表下0.34mで2a層、地表下0.5mで2b層、底面で2c層が確認された。東壁で攪乱の土坑が底面レベルまで達していたほかは、遺構は確認されなかった。2a層で土師器小片6点が出土した。

I地点は、F地点より4m南に位置し、幅1.3×0.9m範囲、深さ0.75mを掘削した。地表下0.45mで2a層、底面で2b層が確認された。遺構は確認されなかったが、2b層で土師器小片等10点が出土した。

G地点は、I地点より6m南に位置し、幅1×0.9m範囲、深さ0.9mを掘削した。地表下0.35mで2a層、地表下0.66～0.78mで2b層が確認された。遺構は確認されなかったが、2a層で土師器小片1点、須恵器小片1点、2b層で土師器小片4点が出土した。

H地点は、最も南に位置する基礎部で、幅1.3×0.9m、地表下0.75mまで掘削した。全て2a層に類似した土層で

あったが、所々にガラスや現代陶器、セメントなどを含んでいたため、表土・攪乱層と判断した。底面で土師器環1点および土師器小片2点出土した。

A～I地点の状況からは、旧地形は北から南に傾斜しており、包含層に大きな影響はないものと判断した。残りの掘削工事は慎重に進めるように指示し、調査を終了した。

基本土層は以下の通りである。

2a層：黒褐色10YR2/2シルト。土器細片や木炭を含む。かなりしまり良い。土器小片がわずかに出土する。

2b層：黒褐色10YR2/2シルト。しまりが良く、わずかに遺物小片を含む。

2c層：黒褐色10YR2/2類似（やや明るい）シルト。しまりが悪く、遺物をほとんど含まない。

3層：褐色7.5YR4/4シルト。まれに暗赤褐色5YR3/6の小礫を含む。基盤のローム層。遺物なし。

附属小学校と民家の境界になるブロック塀地点は、ブロック塀に沿って、幅1.4×0.6m、地表下0.3mの掘削を実施した。結果、表土の範囲内におさまる。包含層に直接の影響はないと判断し、調査を終了した。

附属中学校のフェンス部分に関しては、南に行くほど良好な包含層が残存している可能性が高いため、工事に際しては慎重な対処が必要となると考えられる。

写真164 C地点掘削（北より）



写真165 A地点東壁土層（北西より）



写真166 D地点東壁土層（北西より）



写真167 E・F地点作業風景（北東より）



写真168 E地点東壁土層（北西より）



写真169 F地点東壁土層（北西より）



写真170 H地点東壁土層（北西より）



写真171 附小民家ブロック塀作業風景（南より）



4. (京町) 教育学部附属中学校給水管補修工事に伴う立会調査 (1739)

<調査期間>

2017年9月1日

<調査面積>

0.53㎡

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

教育学部附属中学校のプール付設シャワー室の水道管の補修工事である。緊急対応として熊本市文化振興課に許可を得た。指導は慎重工事であるが、センター職員が立ち会った。

シャワー外壁から外にある止水弁までの約0.8×0.66mの範囲を掘削した。深さは地表下0.6mである。既存の水道管を切断して新しい管と交換するものである。埋土内で作業が可能であることを確認した。

写真172 作業風景 (南西より)



写真173 掘削状況 (西より)



5. (京町) 教育学部附属中学校体育館改修その他工事に伴う立会調査 (1725)

<調査期間>

2018年1月11・18日、2月13～16日

<調査面積>

260.17㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

教育学部附属中学校体育館の改修その他工事に伴う工事立会である。1月11日、遺構の存在を確認したため熊本市教育委員会文化振興課へ連絡し、立会の中で記録保存するよう指導を受けた。

体育館東側の多目的トイレ新設箇所を1区、屋外階段部分を2区、南側正面入口周辺を3区、西側階段下を4区とした。

1区は現代の影響を強く受けていたが、精査の結果、地表下0.3m付近で住居跡1・ピット3・栗石分布1を確認した。

2区は地表下0.28mで地山を確認し、ピット2・栗石1を検出した。掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。

3区は、中学校体育館南側の比較的広い調査区である。9小区に細分したが、このうち遺構を検出したのは3b・3hの2箇所であった。3aは12×1.5m、地表下0.28mを掘削した。体育館の南4m付近までしかまとまった地山は確認されず、大半を現代掘方が占めていた。3bは15×0.8m、地表下0.26mを掘削した。3aとの接点から西へ3.5mまでの範囲にピット2・土坑1を検出した。掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。3cは樹根撤去に伴う掘削である。幹から半径1.5mほどを地表下0.3m掘削したところで撤去できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。3dも樹根撤去に伴う掘削である。幹を中心に2×2m、地表下0.45m掘削したが、撤去の過程で抜き取り痕が生じた。地表下1mまで及んだが、現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。3eは3.7×0.7m、地表下0.26mを掘削した。3bから1m付近でわずかに地山を確認したほかはすべて現代掘方であった。3fは変則的な形状をしているが、おおむね1.3～2.0×6m、地表下0.38mを掘削した。大半を現代掘方に切られており、中央付近で1.5×0.5mほど地山を確認したにとどまる。遺物は出土していない。3gは4.6×0.7m、地表下0.26mを掘削した。大半を現代掘方と花壇基礎に切られており、中央付近で地山をわずかに確認したにとどまる。遺物は出土していない。3h

は1.8×2.8×6.5m、地表下0.38mを掘削した。西側からビット4基を検出した。掘削が下位に及ばないため詳細は不明である。3iは長さ12m、南西隅は三角形に広がるがおおむね幅1.5m、地表下0.28mを掘削した。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

4区は、体育館西側の歩廊に設けられた2箇所の階段改修に伴い基礎を新設するための掘削である。4aは0.8×0.6mを掘削した。地表下0.31～0.39mで硬化面を検出した。4bは0.94×0.8mを掘削した。地表下0.28mで地山を確認した。大半を現代掘方に切られており残りは良くない。北側の掘方から銅銭が1枚出土した。腐食がひどく文字は読み取れない。4cは0.8×0.6mを掘削した。地表下0.28mで栗石と、その掘方に切られるプランを1基検出した。溝とみられるが遺存状況が良好ではなく、遺物も出土していないことから詳細は不明である。4dは0.8×0.8mを掘削した。地表下0.26mで栗石を検出した。

部分的な確認にとどまったが、当調査区は0719・0721調査区と1417・1443調査区の間位置しており、両者を補完するものといえよう。

写真174 1区作業風景（南より）



写真175 1区遺構検出状況（南より）



写真176 1区住居跡完掘状況（南より）



写真177 4a・4b調査区近景（北より）



写真178 4a硬化面掘削状況（南より）



Ⅱ-7 新南部地区

(図9参照)

1. (新南部) 加工舎取り壊し工事に伴う立会調査 (1732)

<調査期間>

2018年3月7・22日

<調査面積>

80.92㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

教育学部附属新南部農場における加工舎の解体、および加工舎周辺の樹根撤去に伴う工事立会である。

樹根①は幹を中心に2.4×2.4mの平行四辺形状に掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根②は2.2×2.2mを掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根③は2.2×2.2mを掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根④は2.3×1.9mを掘削し、地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できた。掘方北端は加工舎基礎に南接しており、トレンチもかねて基礎脇を掘削すると、地表下0.3mで基礎底部を検出した。逆丁字状で、0.07m外側へ張り出し、0.2m幅の掘方がある。地表下0.42mで基礎下割石を検出し、地表下0.6mで地山を確認した。遺物の検出はないが、土師器を数点出土した。

樹根⑤は2.4×2.4mの掘削だが、掘削範囲の南西隅に屋外洗いの基礎が存在するため一部狭くなっている。地表下0.32mまでの掘削で撤去できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

樹根⑥は5本が近接しており、周囲を取り囲むようにレンガが埋め込まれていた。5本のうち4本は掘削することなく撤去できたが、残り1本について幹を中心に1.6×2.2mを掘削し、地表下0.24mまでの掘削で撤去できた。現代埋土にとどまり遺構・遺物は確認されなかった。

樹根⑧は上辺2.3m下辺1.9m高さ1.7mの逆台形状に掘削した。地表下0.3mで包含層を確認し、地表下0.39mまでの掘削で撤去できた。遺物は出土していない。

樹根⑩は1.6×2.0mを掘削した。地表下0.32mで包含層を確認した。地表下0.4mまでの掘削で撤去できた。

近世陶磁器片を1点出土した。

樹根⑫は2.1×2.3mを掘削した。地表下0.3mで包含層を確認した。地表下0.5mまでの掘削で撤去できたが、西壁から約0.4m幅で遺構の一部とみられるプランを検出した。大半は調査区外へ広がるかとみられ詳細は不明である。土師器数点を出土した。

樹根⑦⑨⑪は掘削することなく撤去できた。

加工舎の基礎撤去に伴う掘削では、当初は基礎の両側を0.8m幅で掘削、底部を露出させ撤去する計画だったが、樹根④撤去時の結果から片側だけの掘削で撤去可能と判断し、掘削方法を変更した。外壁は内側、梁は東側・南側を掘削したが、造りつけカマドの部材にダイオキシン汚染が確認されたため別途撤去することになり、その便宜を図るため加工舎の東壁と北壁については建物外側を掘削した。西壁横を掘削中に遺構を検出し、現地での協議の結果、掘方埋土を掘削し基礎下部を露出すれば撤去可能であると確認でき、掘削を回避することができた。西壁横では、北側は地表下0.39mで包含層を確認。北端1.5m付近から地表下0.21～0.38mで遺構を検出した。東側で1.3m幅、西側で0.6m幅を測る。近世とみられる。梁部分では、北側では地表下0.27m、南側では地表下0.26mで包含層を確認したが、横梁部分は地表下0.38mで包含層を確認した。南壁横では、西側は地表下0.49mで包含層を確認した。東側は地表下0.4mで現代埋土であった。東壁横では、北側は地表下0.28m、中央付近は地表下0.36mで包含層を確認した。北側1m付近の0.4×0.4mの枠は掘削なしに撤去できたが、掘方を観察した結果地表下0.35mで包含層、地表下0.59mで地山を確認した。北壁横では、地表下0.28～0.3mで包含層を確認した。加工舎中央北側の地下貯蔵庫跡は、地表下0.5m付近で破砕撤去し下位は残置することになっていたが、基礎と地表土との間に0.1m程度の隙間が見えていたことから遺跡へ影響を与えず作業可能であることを確認し、慎重工事を指示して立会を終了した。

工事立会中、樹根①⑥周辺をはじめ、加工舎東隣の農夫舎横に積み上げられたものなど相当量のレンガを目にしたが、前述のカマドの部材を除いてはすべて「熊本監獄」銘のレンガであった。新南部農園は昭和31年(1956)、教育学部の黒髪移転後新たに取得し整備されたという経緯から1次利用であるとは考え難く、黒髪地区で解体されたレンガ建物の部材を2次利用したものと思われる。

図9 新南部地区における調査地点配置図 (1/1250)

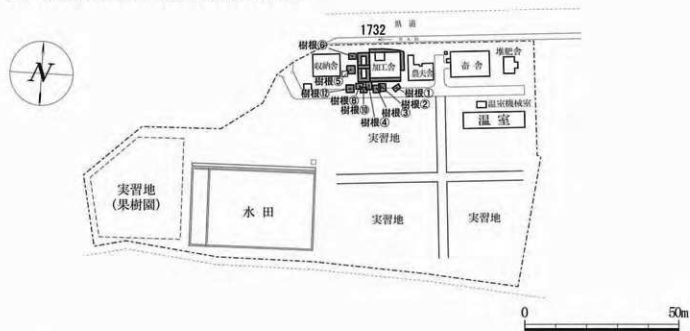


写真179 調査区近景 (南西より)



写真181 加工舎西壁横造構検出状況 (南より)



写真180 樹根②撤去完了状況 (東より)



Ⅱ-8 城東地区

1. (城東町) 教育学部附属幼稚園管理棟遊戯室災害復旧工事に伴う立会調査 (1710)

<調査期間>

2017年8月28日

<調査面積>

0.18㎡ (2.08㎡)

<調査員>

大坪志子

<調査概要・結果>

教育学部附属幼稚園の敷地の南にある塀に沿って、フェンスを設置する工事で、基礎の掘削に立ち会った。

基礎は2m間隔で13箇所設置予定である。この中で3箇所を試掘した。東側の①トレンチでは、地表下0.35mでロームと考えられる粘土層が検出されたが、その下位より焦土が検出され、プライマリーな土層ではない。予定の地表下0.55mまで掘削したが、遺物包含層や遺構面は検出されなかった。

写真182 ②地点作業風景 (東より)



写真183 ①地点掘削状況 (東より)



写真184 ②地点掘削状況 (東より)



写真185 ③地点掘削状況 (東より)



工事範囲の中央、②トレンチは、表層(厚さ0.25m)が砂層、その下は厚さ5cm程の砂利の層、その下はやはり砂層であった。表層の砂は砂場の跡かと考えられ、砂利の下の砂は黒色の粗粒で洪水砂のようであった。本地点でも、遺物包含層や遺構面は検出されなかった。

西側の③トレンチでは、砂の表層(厚さ0.1m)の下に、①トレンチで確認した粘土層(厚さ5cm)があり、その下は砂層であった。この砂は細粒で、海砂のようであった。本地点でも、遺物包含層や遺構面は検出されなかった。

Ⅱ-9 渡鹿地区

(図10参照)

1. (渡鹿) 教育学部倉庫新営電気設備工事に伴う 立会調査 (1729)

<調査期間>

2018年2月21日～23日

<調査面積>

49.5㎡

<調査員>

吉留 広.

<調査概要・結果>

教育学部倉庫の新営にあたって管理棟から電気を引くため、埋設配管・ハンドホールを新設する工事に伴う立会調査である。

ハンドホール新設のための掘削は2箇所あり、1箇所目は既存倉庫の南西端から南側に5.2mのところを2×2mの範囲で地表下1.3mまで掘削した。途中深さ0.8～1.2mで給水管と思われる鉄管を確認したが、現在使用していないことがわかったため撤去した。また、地表下1.2mのところ東壁に半分ほど埋まる形でヒューム管がみつかった。工事には支障がなかったため、現地にとどめることとした。掘削範囲内は鉄管やヒューム管の掘方埋土内におさまった。しかし、底面からは黒色土の地山と思われる層を確認した。遺構・遺物の検出はなかった。

2箇所目は管理棟の南西端から西側へ8.9mのところを2×2mの範囲で既定の地表下1.3mまで掘削した。途中、深さ1mのところロームが多く混じる非常に硬く締まった層を検出した。直上に瓦が張り付いていたため、新しい時期のものと判断し、範囲を記録した後既定の深さまで土を観察しながら掘削していくと、ロームが多く混じる層の下層は順に、礫を多く含む灰黄褐色土の層、ロームが多く混じる層、礫を多く含む黒褐色土の層となっており、さらにこの層の下からは一部、ロームを多く混じる層が顔を出したことから、互層積みをおこなっている様子がうかがえた。当該地点は終戦時まで工兵第六連隊の兵営が置かれており、これらの土は兵営が建っていた時期の造成土である可能性がある。

埋設配管配線新設箇所は、管理棟の南西端から2箇所目の樹までを繋ぐルート・2箇所目から1箇所目のハンドホールに繋ぐルート・1箇所目のハンドホールから新設する教育学部倉庫に繋ぐ北西に延びるルートがある。掘削は1m以内でありハンドホール箇所の掘削状況から包含層に影響はないと考えられ、慎重に工事をおこなう

ように指示した。しかし、管理棟から2箇所目のハンドホールにつながるルート箇所はハンドホールから管理棟にかけて地形が下がり1m掘削すると包含層への影響が考えられたため調査をおこなうこととした。

幅0.9×4mの範囲を掘削したところ、管理棟南西端から西側0.6～1.2mにかけて地表下0.8mのところ黒色土の地山を検出した。工事は0.8mの深さがあれば施行できるとのことであったためそれ以下を掘削しないように指示し調査を終了した。

写真186 No.①調査区近景 (南より)



写真187 樹①掘削状況 (北より)



写真188 樹②掘削状況 (東より)



図10 渡鹿地区における調査地点配置図 (1/2000)

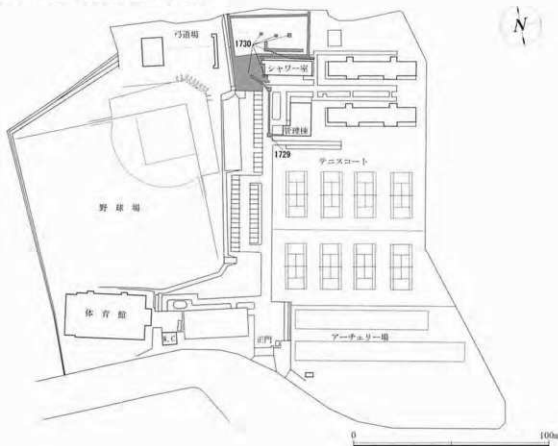


写真189 管理棟西側箇所掘削状況 (南西より)



2. (渡鹿) 教育学部倉庫新営その他工事 (建築・機械設備) に伴う立会調査 (1730)

<調査期間>

2018年2月21・22日

<調査面積>

562.5㎡

<調査員>

吉留 広

<調査概要・結果>

教育学部倉庫新営にあたり建築・機械設備に係る立会調査である。本工事で掘削を伴う工事箇所として①建物布基礎箇所②建物柱基礎③建物ビット箇所④給水管・排水管箇所⑤排水管・ガス管箇所⑥コンクリートブロック門柱基礎箇所⑦土間・緑石箇所があった。これらの工事の中で最も掘削深度を要する④の既存倉庫の北側箇所と南西端箇所を先に調査し、その他の箇所は状況を見て判断することとした。

既存倉庫北側箇所は倉庫の東端から北側に1.8m、東側に4.1mのところにある樹と既存倉庫の西端から北側に1.7m西側に0.8mのところにある樹に排水管を繋ぐための掘削である。地表下1mから0.7mになるように東側から西側へ徐々に高くなるように勾配をつけ、1.3×31.7mの範囲を掘削した。東側の樹から西側に0.2mは樹の掘方になっており、そこから西側7.6mにかけて地表下0.9mのところまで暗褐色の近世包含層と思われるものを確認した。近世包含層と思われる層を切る形で西側7.6～9.2mにかけて灰褐色の層が確認された。この層からはコンクリート片は見られなかったが、9.2mから以西はコンクリートを含む現代の埋土に切られていた。灰褐色

色の層は西側に立ち上がりが見られなかったため、広がりには確認できなかったが、近世から近現代の溝か落ち込みの可能性がある。東側は地表下1mの掘削予定であったが0.9mあれば工事が施工できるということであったため、包含層の掘削はしていない。遺構・遺物の検出はなかった。

既存倉庫の南西箇所は、倉庫の南西端から南側に0.5mいったところを基点に東側へ0.7m、西側へ3.6mの長さ4.3mを幅1mの範囲で地表下0.75mまで掘削した。範

写真190 倉庫北側給水・排水管箇所東側作業風景（北東より）



写真191 倉庫南西端給水・排水管箇所掘削状況（東より）



写真192 倉庫北側給水・排水管箇所掘削状況（東より）



囲内にはフューム管や塩ビ管が4本入り組んでおり全て掘方埋土内におさまった。遺構・遺物の検出はなかった。そのほかの①～③、⑤～⑦の工事は深さが0.8m以内におさまることから、包含層への影響はないと判断し慎重に工事することを指示し調査を終了した。

写真193 排水管箇所南壁土層断面（北東より）



Ⅱ-10 渡鹿地区 (宿舎)

1. (渡鹿2) 渡鹿住宅2号棟屋外ガス管改修工事に伴う立会調査 (1731)

<調査期間>

2018年3月6日

<調査面積>

1.55㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

渡鹿住宅2号棟の屋外ガス管改修工事に伴う立会調査である。

2号棟の東側、1.55×1.0mを掘削した。地表下0.5mでコンクリート製基礎を検出した。調査区のほぼ中央を縦断しており、0.2m幅で上部に凹凸はない。地表下0.7mでL字状の下部構造を検出した。壁の基礎と考えられる。コンクリートの密度は低く、レンガ片が混入するなど粗悪である。基礎の下は0.1mほど現代埋土が入る。西壁付近から地表下0.8mでガス管の止栓部を検出した。掘方の外側は近代整地層である。地表下1.37mまで掘削したが、遺構・遺物の検出はない。これ以上の掘削はないことを確認して立会を終了した。

写真194 調査区近景 (南より)



写真195 土層断面 (北より)



Ⅱ-11 新屋敷地区

(図11参照)

1. (新屋敷1) 新屋敷1号宿舎取り壊し工事に伴う立会調査 (1737)

<調査期間>

2018年3月26・28日～4月3日

<調査面積>

69.66㎡

<調査員>

土野雄貴

<調査概要・結果>

熊本地震により被害を受けた新屋敷1号宿舎の取り壊しに伴う工事立会である。熊本市教育委員会による新屋敷遺跡群第36次調査 (以下「市36次調査」) と隣接している。宿舎および水道管・ガス管・門・樹木が撤去対象となった。

観察の結果、層序は5層に分かれる。

1層は現代とした。市36次調査の1a・1b層に当たる。

2層は大量の炭・焼土。強い2次焼成を受けた瓦を伴っており、空襲痕跡と判断し近代とした。市36次調査の1c・1dおよび11a層に当たる。

3層は近世とした。市36次調査の11b層に当たる。

4層は古代とした。市36次調査の111層に当たる。

5層は遺物を伴わなかったことから立会時には地山としていたが、市36次調査の11V層に相当することから縄文～古代の下部包含層とした。

建物基礎は、撤去に先立ち5箇所を基礎際0.35m幅掘方埋土内を掘削し確認したところ、底部まで断面形状の変化はなく、その下位は栗石層であった。栗石層までの深さは地表下0.25～0.32mである。栗石は撤去対象外であったため、掘削なしに撤去することができた。

門扉基礎は、既設配管の位置を確認しながらの掘削となったため、樹根①掘方と重複するように4×2.7mの範囲で不定形な掘方となった。地表下0.3mで横に広がる下部構造があり、以下は残置することとなったため掘削なしに撤去することができた。

ガス管は、市道からの引込み部分がこの下部構造を下越していたため、基礎の脇を地表下0.9mまで掘削して切断撤去した。地表下0.25mまで1層、地表下0.51mまで2層、地表下0.77mまで3層、以下は4層であった。ガス管は引込み箇所から急激に立ち上がり、細い鉄管へ接続していたため、両端の地上露出部分から重機を用いて引き上げ、撤去することができた。給水管も同様に撤去した。塩化ビニール製の排水管は、掘方埋土を掘削し

図11 新屋敷地区における調査地点配置図 (1/2000)



て管を露出させ撤去した。遺跡への影響はない。

樹根は、掘削を伴った21本について記録した。掘削は2層までを目安とし、そこで切断除去する方針で臨んだが、いくつかの樹根については抜取り痕が生じた。

樹根①は1.45×1.5mを掘削した。地表下0.4mで3層を確認。撤去の過程で直径0.4m、深さ0.5mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内で地表下0.65mから4層、地表下0.8mから5層を確認した。

樹根②は2.4×2.5mを掘削した。地表下0.32mから2層、地表下0.44mから3層を確認した。ここで切断除去でき下位への影響はなかった。

樹根③は2.1×2.6mを掘削した。地表下0.25mで2層を確認した。ここで切断除去でき下位への影響はなかった。

樹根④は幹を中心に直径2.8mを掘削した。地表下0.3m付近で近代とみられる栗石を検出した。地表下0.43mで3層、地表下0.58mから4層を確認した。土師器・須恵器を出土している。ここで切断除去でき下位への影響はなかった。

樹根⑤は1.9×1.7mを掘削した。地表下0.08mで2層と建物基礎を検出した。地表下0.23mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑥は2.0×1.65mを掘削した。地表下0.25mで3層を確認。撤去の過程で直径0.9m、深さ0.31mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下0.46mで4層を確認した。

樹根⑦は1.75×1.7mを掘削した。地表下0.32mで2層、地表下0.4mで3層を確認し、撤去の過程で0.8×0.4m、深さ0.4mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下0.67mで4層を確認した。

樹根⑧は1.84×1.75mを掘削した。地表下0.32mで2層、地表下0.4mで3層を確認した。ここで切断撤去でき下位への影響はなかった。

樹根⑨は2.3×2.0mを掘削した。既設の構造物を避けたためやや不定形である。地表下0.09mで2層と栗石を検出した。地表下0.26mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑩は1.8×1.8mを掘削した。地表下0.3mで2層と建物基礎を検出した。地表下0.4mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑪は1.8×1.8mを掘削した。地表下0.18mで2層と栗石を検出した。地表下0.32mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑫は1.2×1.5mを掘削した。地表下0.11mで2層と建物基礎を検出した。地表下0.28mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑬は1.5×1.8mを掘削した。地表下0.26mで2層を確認し、撤去の過程で0.4×0.8m、深さ0.54mの抜取り痕が生じた。抜取り痕内から地表下0.42mで3層、地表下0.7mで4層を確認した。

樹根⑭は1.8×1.8m、既設の構造物を避け台形状に掘削した。地表下0.14mで2層を確認した。地表下0.26m

まで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑮は1.8×1.3mを掘削した。地表下0.19mで2層を確認し、地表下0.22mで建物基礎を検出した。地表下0.29mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑯⑰⑱は掘方が接しており、また既設構造物を避けたため不定形であったが、3.8×1.4mを掘削している。樹根⑯では地表下0.16mで2層を確認し、地表下0.24mで建物基礎を検出した。撤去の過程で直径1m、深さ0.36mの抜き取り痕が生じた。抜き取り痕内から地表下0.4mで3層を確認した。樹根⑰では地表下0.26mで2層を確認した。ここで切断撤去し下位への影響はなかった。樹根⑱では地表下0.3mで2層を確認した。ここで切断撤去し下位への影響はなかった。

樹根⑲は1.65×1.05mを掘削した。地表下0.2mで2層を確認した。地表下0.34mまで掘削し、切断撤去した。2層土にとどまり下位への影響はなかった。

樹根⑳は1.35×1.15mを平行四辺形状に掘削した。地表下0.25mで2層を確認した。撤去の過程で0.3×0.4m、深さ0.25mの抜き取り痕が生じた。抜き取り痕内から地表下

0.33mで3層を確認した。

樹根㉑は1.2×1.0mを掘削した。地表下0.25mで2層を確認した。ここで切断撤去し下位への影響はなかった。これ以上の掘削がないことを確認して立会を終了した。

写真198 樹根④撤去完了状況（東より）



写真196 調査区近景（東より）



写真197 基礎周り②掘削状況（東より）



第三章 文化財活用活動の記録

埋蔵文化財調査センターは、1994年より実施している構内遺跡の調査成果やその重要性について、生涯教育での活用を目的として、展示などの活動を通じて大学内外に発信している。

本センターでは、前年度に実施した調査成果を速報展として公開するが、2017年度は前年4月に発生した熊本地震の影響で、構内遺跡調査の実施がなかった。このため、企画展を実施した。

このほか、オープンキャンパスやホームカミングデイ、授業協力などをとおして、調査成果の公開事業を開催した。

1. 特別展示『生活道具はかわらない?』

<開催期間>

2017年12月1日～2017年4月27日

<開催場所>

埋蔵文化財調査センター展示室

<概要>

これまで実施してきた構内調査で出土した遺物について、「生活道具」という視点にたった企画展を実施した。遺物を「器」「装身具と遊具」「調理道具」「採集道具と加工具」「墓と副葬品」の5つのテーマに分け、江戸時代・近代・現代の生活道具類とともに展示し、その機能がほとんど変わらないことなどを紹介した。開催期間中は、学内外から209名の参加があった。

<掲載記事・報道>

2017年12月8日 熊本日日新聞

2017年冬期：『熊大通信』vol.67

写真199 特別展示 展示説明会実施状況



2. 熊本大学オープンキャンパス2017「熊大遺跡巡り」

<開催期間>

2017年8月5日

<開催場所>

黒髪南キャンパス

<概要>

毎年実施される、オープンキャンパスの際に、本学を訪問した高校生や保護者を対象に展示室の開放と、構内遺跡巡りを実施した。遺跡巡りでは、工学部技術部と共同開発したアプリ「クマダイ遺跡巡り」を利用した。構内に設置してある遺跡解説版すべてを巡った方には、オリジナルキャラクターをデザインしたステッカーを配布した。参加・挑戦者は21名。

写真200 センター展示見学の様子



3. 授業等への協力

・2017年4月12、19、26日、5月10日：グローバル教育カレッジの小池ウルスラ先生・チャン・チェオン・ジェン先生の授業協力と受講生48名がセンター展示室を見学。展示説明とアプリを用いた授業協力。

・2017年4月27日：文学部の木下高子先生と約10名の学生の授業協力。

・2017年5月16日：文学部の木下高子先生と71名（史学概論受講生）の学生の授業協力。

・グローバル教育カレッジのクリストファー・ジョンソン先生と27名の授業協力。

・2017年12月13日：文学部の小畑弘己先生と約40名の授業協力。

<掲載記事・報道>

2017年5月19日 熊本日日新聞

2017年6月5日 朝日新聞

2017年7月10日 RKK ラジオ「熊本よかもん見つけ隊」

2017年夏期：『熊大通信』vol.65

写真201 『クマダイ遺跡巡り』を利用した遺跡巡りの様子



Summary

In current year, we have started revival from earthquake disaster damages in earnest. The work is the normal facilities maintenance that became the reservation because of an earthquake disaster and correspondence to earthquake disaster damages. The number of investigations in the current year excavation is 3, presence investigations is 37.

In Kyomachi area, the personnel office building of the elementary school attached to faculty of education which earthquake disaster damage was heavy will be rebuilt at the same place. We carried out a presence investigation to confirm the situation of the remains around and between the building basics before dismantling. And we confirmed the situation of remains about the range of the new building (1707 excavation spot). As the result, we found some pit dwellings and postholes of Nara ~ Heian period, and relics of Jomon, Yayoi, Nara ~ Heian and modern period. The situation of the remains is fine, so this information will be useful for a construction design and the plan of our work around this area in the future.

In Kurokami south area, Kruokami south C2 (Architecture and Building Engineering, Civil and Environmental Engineering) which earthquake disaster damage was heavy will be rebuilt at the same place, too. The range of the new building is planned that a range is expanded on the north side, the east side from an existing building. Because the foundation of this building under the ground was deep in the existing building, remains were not left between building basics, but, in the neighborhood, we found remains as expected. We found some pit dwellings and three big ditches and a lot of postholes of Nara ~ Heian and modern period (1724 excavation spot). The remains in the range of the existing building have been already lost, but became valuable information to bind the investigation result that has been carried out in both East-West areas of Kurokami south area together.

For an environmental improvement project, the old administration building demolition work of the hospital attached to the medical department in Honjo north area was big work. The remains were avoided destruction between building basics of the old administration building (1708 excavation spot). At this research point, we found street ruins that leading from Kumamoto castle to Hyuga (currently Miyazaki Prefecture) was called Hyuga Oukan. It is sunken road-formed rare structure in spite of this way going along the level ground. It was recognized that the street became extinct when University hospital moved to the present location by remains. It is the magnificent results that thinking about the change of the castle town from Edo era to the Meiji era as the new knowledge.

In addition, we carried out presence investigation and excavation during the work of municipal road widening with the rebuilding of the Ryujin bridge in Kurokami north and south area, and carried out presence investigation and excavation during the update work of the lifeline in Honjo south area.

There was a notable matter this year. It is that there was the support of the investigator from research center for buried cultural properties, Kagoshima University. Successful execution of the works owes a lot to this human support in this year.

We really appreciate thank for flexible idea and correspondence of Kagoshima University, research center for buried cultural properties, Kagoshima University and facilities department, Kumamoto university very much.

급년은 구마모토 지진으로부터 본격적인 부흥을 개시한 해이다. 급년도 사업은 지진 재해 대응을 위해서 보류된 통상 시설 정비 사업과 지진 재해 피해에 대응하는 사업이다. 2017년도에 실시한 조사는 발굴 조사 3건, 입회 조사 36건이다.

지진 피해가 컸던 교마치 지구의 교육학부 부속 초등학교 관리동은 같은 장소에 재건하게 되었다. 건물의 기초를 해체하기 전에 입회를 실시하고, 기초의 사이와 기초 주변을 확인했다. 아울러, 신축 건물의 범위에 대해서도 확인했다(1707 조사 지점). 그 결과 고대의 수혈주거와 주혈, 야요이시대, 고대, 근대의 유물들이 확인되었다. 유적의 잔존 상황이 양호해서, 향후, 본지구 관리동 남쪽 공사의 설계나 조사에 있어서 참고가 될 것이다.

쿠로카미 남지구의 쿠로카미 남C2(구조공학부 1호관)의 피해도 심각해서, 본건물도 같은 장소에서 재건하게 되었다. 신축 건물의 범위는 기존 건물보다 북쪽 및 동쪽으로 범위가 확장될 계획이다. 기존 건물은 지하 구조가 깊고, 기초 사이에 유적이 남아 있지 않았지만, 그 주위에서는 예상대로 고대의 유적이 확인되었다(1724 조사 지점). 수혈건물과 큰 도랑, 많은 주혈군이 검출되었다. 기존 건물 범위 내의 유적은 이미 유실되었지만, 쿠로카미 남지구 동서 양지역에서 실시되어 온 조사 성과를 잇는 귀중한 정보가 되었다.

환경 정비 사업으로서의 혼조 북지구의 의학부 부속 병원 구관리동 해체가 큰 사업이었다. 구관리동의 기초 사이에는 유적이 파괴되지 않고 남아 있었다(1708 조사 지점). 본조사 지점에서는 구마모토 성과 휴가(현재 미야자키현)를 연결하는 휴가 왕래(日向往還)의 구루트라라고 생각되는 도로터가 발견되었다. 평지이면서 절단해서 길을 낸 드문 구조이다. 출토 유물에 의해서 부속 병원이 현재위치로 이전했을 때에 폐절된 것도 판명되었다. 에도시대부터 메이지시대에 걸친 성시의 변천을 생각하는데 있어 새로운 지견으로서 큰 성과이다.

이 외에 혼조 남지구의 라이프라인의 갱신사업과 관계된 입회, 발굴 조사, 쿠로카미 북, 남지구에서는 새로운 류진(龍神) 다리의 가교 공사와 관계된 시도화장등사업에 관한 입회, 발굴 조사등을 실시했다.

급년에도 특별해야 할 일이 있었다. 가고시마대학 매장문화재 조사 센터로부터 조사원의 지원이 있었던 것이다. 급년도의 사업을 수행할 수 있던 것은 이 인적 지원이 기여할 바가 컸다. 유연한 발상과 대응을 해 주신 가고시마대학, 가고시마대학 매장문화재 조사 센터, 및 본대학 시설부에는 감사 말씀드립니다.

付篇 1 2017年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1. 熊本大学埋蔵文化財調査センター規則 (H29.4.1～)

(趣 旨)

第1条 この規則は、熊本大学学則(平成16年4月1日制定)第9条第2項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査センター(以下「センター」という。)に関し必要な事項を定める。

(設置目的)

第2条 センターは、熊本大学(以下「本学」という。)に所在する遺跡を発掘調査するとともに、出土した埋蔵文化財を記録、研究、保存及び活用し、もって本学の教育研究に寄与することを目的とする。

(業 務)

第3条 センターは、次に掲げる業務を行う。

- (1) 埋蔵文化財調査の実施計画の立案及び実施に関すること。
- (2) 出土した埋蔵文化財の整理・研究、保管及び保存に関すること。
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。
- (4) その他センターの目的を達成するために必要な事項。

(職 員)

第4条 センターに、次に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 専任教員
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長の選考は、本学の専任の教授のうちから、第7条に規定する委員会の推薦に基づき、学長がおこなう。

- 2 センター長は、センターの業務を掌理する。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長に欠員が生じた場合の補欠のセンター長の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

(専任教員)

第6条 専任教員の選考は、熊本大学学内共同教育研究施設等の人事等に関する委員会の議に基づき、学長がおこなう。
2 専任教員の選考に関し必要な事項は、別に定める。

(委員会の設置)

第7条 センターの管理運営に関する事項を審議するため、熊本大学埋蔵文化財調査センター運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(委員会の組織)

第8条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) センターの専任教員
 - (3) 文学部及び教育学部から選出された教授又は准教授 各1人
 - (4) 法学部、大学院社会文化科学研究科又は大学院法曹養成研究科から選出された教授又は准教授 1人
 - (5) 大学院先端科学研究部から選出された教授又は准教授 2人
 - (6) 大学院生命科学研究部の医学系又は医学部附属病院から選出された教授又は准教授 1人
 - (7) 大学院生命科学研究部の保健学系及び薬学系から選出された教授又は准教授 各1人
 - (8) 発生医学研究所、生命資源研究・支援センター又はエイズ学研究センターから選出された教授又は准教授 1人
 - (9) 運営基盤管理部施設管理課長
 - (10) その他センター長が必要と認めた者 若干人
- 2 前項第3号から第8号まで及び第10号の委員は、学長が委嘱する。
- 3 第1項第3号から第8号までの委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

4 第1項第3号から第8号までの委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前項の規定にかかわらず、前任者の残任期間とする。

5 第1項第10号の委員の任期は、学長が委嘱の都度定めるものとし、再任を妨げない。

(委員会の審議事項)

第9条 委員会は、センターに関する次に掲げる事項（熊本大学学内共同教育研究施設等の人事等に関する委員会規則（平成16年4月1日制定）第3条に定める事項を除く。）を審議する。

- (1) センターの業務に関すること。
- (2) センター長候補者の推薦に関すること。
- (3) 施設及び予算に関すること。
- (4) その他センターの管理運営に関すること。

(委員長)

第10条 委員会に、委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議事)

第11条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第12条 委員長は、必要があるときは、委員以外の者を委員会に出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第13条 センター及び委員会の事務は、運営基盤管理部施設企画ユニットにおいて処理する。

(権限)

第14条 この規則に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

1 この規則は、平成23年10月1日から施行する。

2 国立大学法人熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則（平成16年4月1日制定）及び熊本大学埋蔵文化財調査室要項（平成16年4月1日制定）は、廃止する。

3 この規則施行後、最初に任命されるセンター長は、第5条第1項の規定にかかわらず、この規則により選考されたものとみなす。

4 この規則施行後、最初に任命されるセンター長の任期は、第5条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

5 この規則施行後、最初に委嘱される第8条第1項第3号及び第4号の委員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則（平成24年12月27日規則第142号）

この規則は、平成25年4月1日から施行する。

附 則（平成27年3月13日規則第94号）

この規則は、平成27年4月1日から施行する。

附 則（平成28年2月5日規則第9号）

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成28年3月1日規則第30号）

この規則は、平成28年4月1日から施行する。

附 則（平成28年9月23日規則第404号）

この規則は、平成28年9月23日から施行する。

附 則（平成29年3月31日規則第153号）

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

2. 2017年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1 埋蔵文化財調査センター組織

＜センター長＞	(併・文学部教授)	伊藤 正彦 (2017.4.1～)
＜専任教員＞		大坪 志子 山野ケン陽次郎
＜技術補佐員＞ (2015年5月～)		吉留 広
	(2017年4月～)	土野 雄貴
＜事務補佐員＞ (2016年4月～)		濱田 春美
＜室内作業員＞ (2017年4月～2018年3月)		園田 智子 後藤 恵 江口 路 鬼塚 美枝 小山 正子 井上 裕美 首藤 優子 末吉 美紀 増井 弘子
	(2017年6月～2018年3月)	
	(2017年6月～9月)	

2 埋蔵文化財調査センター運営委員会

委員長	伊藤 正彦 (埋蔵文化財調査センター長)	任期 (2017.4.1～2019.3.31)
委員	小畑 弘己 (文学部教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	神野 雄二 (教育学部教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	平田 元 (大学院法曹養成研究科教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	中田 晴彦 (大学院先端科学研究部准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	伊東 龍一 (大学院先端科学研究部教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	宇宿 功市郎 (医学部附属病院教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	米田 哲也 (大学院生命科学研究部保健学系准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	杉浦 正晴 (大学院生命科学研究部薬学系准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	古嶋 昭博 (生命資源研究・支援センター准教授)	(2017.4.1～2019.3.31)
	松下 栄司 (運営基盤管理部施設管理課長)	
	伊藤 正彦 (埋蔵文化財調査センター長)	(2017.4.1～2019.3.31)
	大坪 志子 (埋蔵文化財調査センター専任教員)	
	山野ケン陽次郎 (埋蔵文化財調査センター専任教員)	

審議事項

2017年5月10日

議題

- 1) 平成29年度埋蔵文化財包蔵地における土木工事予定一覧について
- 2) 平成29年度埋蔵文化財調査センター予算配分(案)について
- 3) 埋蔵文化財調査センター教員の任期制見直しについて
- 4) 埋蔵文化財調査センター教員の人事計画について
- 5) その他

報告

- 1) 平成28年度埋蔵文化財発掘調査結果一覧について
- 2) 平成28年度埋蔵文化財調査センター予算の支出実績について
- 3) その他

付篇2 埋蔵文化財調査センター2017年度調査・研究活動記録

【調査員】

大坪志子

<研究発表>

- ・「蛍光 X 線分析 (XRF) と主成分分析 (PCA) の石材研究への利用」考古学研究会岡山2017年11月例会 (2017年11月11日, 岡山大学) (共同: 森康 (北九州市立自然史・歴史博物館)).

<科学研究費>

- ・「九州縄文時代後晩期における玉と縄文文化の実証的研究」平成29～32年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) (研究代表者).

<講演>

- ・「石製装身具の現在と研究法」宮崎県考古学会総会 (2017年6月4日, 生日の杜遺古館).

<その他>

- ・大分県法垣遺跡出土石製装身具に関する所見「法垣遺跡3・4次調査」中津市文化財調査報告第84集, 中津市教育委員会, pp.143.
- ・長崎県原の辻遺跡調査指導委員会 (2017年12月11日, 長崎県埋蔵文化財センター).
- ・熊本県幅・津留遺跡出土石製装身具に関する専門調査 (2018年2月25-26日, 愛媛大学).
- ・熊本大学オープンキャンパス2017 2017年8月5日.

山野ケン陽次郎

<論文>

- ・「琉球列島における縄文時代後晩期の貝製品と製作技術」『鹿児島考古』(47), pp.25-34.

<科学研究費>

- ・平成29年度科学研究費助成事業「先史時代におけるマリアナ諸島の貝類利用の考古学的研究」若手研究 (B) 研究代表者.
- ・平成29年度科学研究費助成事業「3～7世紀の琉球列島における人と文化の交流史研究」基盤研究 (B) 研究分担.

<講演>

- ・平成29年度熊本県高等学校教育研究会地学部会総会「熊本大学黒髪南キャンパスの発掘調査-遺跡は何を語るのか-」(2017年5月26日, 男女共同参画センター はあもにい).

<その他>

- ・天城町下原洞穴遺跡出土貝製品に関する所見 2018年3月19日～21日.
- ・RKK ラジオ番組「小松士郎のラジオのたまご」2017年7月10日.
- ・熊本大学オープンキャンパス2017 2017年8月5日.

付篇3 埋蔵文化財調査センター2016年度新聞記事

図12「熊大遺跡 アプリで「発掘」」

(朝日新聞 2017年6月5日23面転載)

図13「熊大の遺跡 アプリと巡る」

(熊本日日新聞 平成29年5月19日12面転載)

報告書抄録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさせんたーねんぼう 24							
書名	熊本大学埋蔵文化財調査センター年報 24							
副書名								
巻次								
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査センター年報							
シリーズ号	24							
編著者名	伊藤正彦・大坪志子・新里貴之・山野ケン陽次郎・吉留広・土野雄貴・濱田春美							
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1 TEL.096-342-3832 FAX.096-342-3832							
発行年月日	2019年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きょうまちだい 京町台遺跡 (1707地点)	くまもと県 くまもと市 きょうまち 京町	43201	238	32° 49' 3"	130° 42' 16"	20170703 ～ 20170828	582.01㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡 (1708地点)	くまもと県 くまもと市 ほんじょう 本庄	43201	285	32° 47' 47"	130° 42' 45"	20170703 ～ 20180719	4691.71㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
くろがみまら 黒髪町遺跡群 (1724地点)	くまもと県 くまもと市 くろがみ 黒髪	43201	278	32° 48' 48"	130° 43' 40"	20171225 ～ 20180413	405.70㎡	学校敷地内の開発事業に伴う
※北緯・東経の数値は世界測地系に基づく値です								
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
きょうまちだい 京町台遺跡 (1707地点)	集落址	縄文・弥生・古代	竪穴建物・溝・ピット	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・青銅製品		-		
ほんじょう 本庄遺跡 (1708地点)	集落址	古代・近世・近代	道・竪穴建物・柱穴	土師器・須恵器・陶磁器				
くろがみまら 黒髪町遺跡群 (1724地点)	集落址	古代・近現代	竪穴建物・溝・柱穴・ピット・近代建物基礎	土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品・貨幣				

熊本大学埋蔵文化財調査センター年報24
—2017年度—

平成31年3月27日 印刷
平成31年3月29日 発行

編集兼発行者 熊本大学埋蔵文化財調査センター
熊本市中央区黒髪2-39-1
電話 (096) 342-3832
印刷所 シモダ印刷株式会社

Published by
Research Center for Buried Cultural Properties,
Kumamoto University
Kumamoto, 2019